
アクト・ファミリア

カミハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクト・ファミリア

【Nコード】

N5242W

【作者名】

カミハル

【あらすじ】

家族を失った悲しみを埋めるために家族の写し身である五体のアンドロイド、アクトを生み出した研究者。

やがて量産されたアクトは世界中に広がり、人々の生活の支えとなるが、世代を超えて人々に虐げられだしたアクトは人間たちに牙を剥き、ギアと呼ばれる害あるものに姿を変える。

暴走したアクトから人間たちを護る最初に生み出された五体のアクトは、同じ家族同士であるアクトが殺しあう現状を変えようと戦うが、人間はそんな彼らを裏切った。

人間が滅ぶのが先か、全てのアクトが破壊されるのが先か、人間対アクトの全面戦争が始まる。

数億の人間と戦うアクトたちを指揮する初期アクト五体の長男、ガンマ。数多くの同胞と、家族を戦いで失っていくうちにガンマも徐々に壊れていく。

人と家族と二百年戦争

その日、彼は歓喜した。

五年前、家族を事故で失い、その寂しさから逃げるように長年研究し、開発を進めていた物がようやく完成したのだ。

いや、もう者と呼ぶべきだろう。

「博士、バイタル安定、脳波正常、五時間後には起動します」

五年間諦めず、世間と同じように、バカな研究を続けてきた自分を嘲笑うでもなく、真面目に、自分と同じように人生をかけて手伝ってくれた助手が、モニターに作品の状態を表示させた。

「おお……夢のようだ。これでまた、五年前と同じように家族みんなで……」

胸が締め付けられる感覚、だが痛くない。

五年前の事故でも同じような苦しみを味わったが、今回は違う。嬉しいのだ、これから先の未来に待つ、家族との幸せを想像するだけで視界が歪み、涙が溢れ出てくる。

「おめでとうございます博士。これでまた、ご家族との日々を取り戻せるはずです。形式番号XGR-5ではその感動も薄れてしまいます。彼らに名前をつけてあげてください」

助手の言葉に頷くことで答え、五つのカプセルに歩み寄り、それぞれを見つめた。

「名前ならば決まっているよ、妻のヤクモ、長女のシャイン、長男のガンマ、次女のケミネ、三女のレイ、みんな家族の名だ。そしてこれから先にも生まれるであろうアンドロイドたちも、みんな同じ家族となれるよう、名称をアクトとする。目の前のプロトタイプ五体は運用試験という名目で、共に過ごさせてもらおうよ」

「博士の望むままに、上層部には僕の方からそのように報告いたします」

五年前は、絶望のどん底に叩き落された心持だったが、やはり自

分は幸せ物のようだ。

こうして甦った家族と優秀な助手、幸せに満ち溢れているように思えた。

その後、アンドロイド——全体呼称アクトはプロトタイプを除き、全世界にその存在を拡大し、ある者は身寄りのない老夫婦の家庭に、またある者は人手が足りない企業へと進出し、人々に喜びや幸せを運んだ。

アンドロイド作成計画、後のプロジェクトアクトは製作者が家族を失った悲しみを癒すために生み出されたはずが、今では世界中の人々を支える存在となった。

そして百年後——製作者も助手も事故でこの世を去り、プロジェクトアクトは一人歩きを始めた。

アクトの中から、暴走し、人間を襲うものが現われたのだ。

人間を超える身体能力のアクトが人間を襲う。それは人々にとって、大きな恐怖となり暴走を始めたアクトはギアと呼称され、処分されることとなったが、人間の手に負えないギアをどうやって処分したか——答えは簡単。壊れれば替わりのアクトを使ってギアを駆逐すればいい。

時の流れと共に忘れ去られた製作の根元を知らない人間はそう結論した。

それが悲しい家族同士の殺し合いだとも知らず、やがてアクトがギアを狩る図式は当たり前のもとなってしまうた。

ギアを狩る兄妹

「二番と三番隊は人間を連れて避難しろ、一番隊は俺と敵の殲滅に当たれ！」

——世界に広がった家族は、互いに戦っていた。

人工知能——AIのバグや不良動作で人間に牙を剥くギアと、そこから人間を護るために戦うアクト。

製作者が見ればどれだけ嘆き、悲しむだろうか。子供たちが兄弟喧嘩の末に殺し合う。

それを当然に思う人間たちにも、息子同士で戦い合うアクトとギアにも絶望し、悲しみの慟哭を上げるのかもしれない、いや正気を保てるかどうかも怪しい。

そして現在、数十の人間を人質に金属の製造工場内で暴れるギアも、元の原因は過剰労働の結果、暴走を起こしたのだが、それでも彼らは人間に危害を加える敵となった。

「やりきれないねえ……」

部下に指示を出し、暴走で建物自体を壊そうと暴れまわるギアを遠目に眺めながら、ポツリと呟く。

原因が人間にあるうと、結局は暴走を起こしたギアが悪と断じられ、裁かれるのだ。

「ガンマ総隊長、二番と三番隊から避難完了の報告が入りました。人間側の被害、負傷者は十二名、死者が八名とのことです」

「報告ご苦労。レイ、無線で二番隊と三番隊に待機を命じろ、一番隊は戦線離脱し別任務が来た時のために帰還。あとは俺とレイで片付けるぞ」

部隊総隊長、ガンマ・アクトリプス。

そして副隊長のレイ・アクトリプス。

二人は、初期型の規制がかかっていない頃に開発されたアクト、他の部下に比べて、状況判断などの選択が早く、一番人間に近い。

規制のかかったAIを積んだ現行世代のAIでは、指示を受け入れ、その通りに行動するのが精一杯だろう。

レイに指示を伝え、目の前でギアを食い止める部下たちに撤退命令を出してもらい、敵を見据える。

ボサボサの腰まで伸ばした黒髪と、死神のような漆黒のマントを身に纏い、背中から顔を出した剣を握り、小さく笑む。

「レイ、お前は周囲の雑魚を片付けろ。俺はでかいのを片付ける」

白髪のショートヘアーが首を縦に振る動きに合わせて小さく揺れる。

白い髪に、純白のローブ、その両手には手の甲に光沢を放つ石がはめ込まれた皮手袋、華奢なレイには無骨な武器。

彼女は言葉一つ発することなく、首を動かす動作だけで了解の意を示し、暴れまわるギアの下へと歩き出した。

それを見送り、ガンマも自分の標的に視線を移す。

工場の中心で突っ立っている大柄な体。

ガンマやレイ、そして周囲で暴れるギアたちとは違い、人の姿を完全には模していない分、その肉体はガンマの倍、三メートル強の高さ。重量物を運搬する作業がメインとなるため、骨格や筋肉などもそれ相応のスペックを積んでいるだろう。

目の前まで近づくがやはり大きい。

ガンマはギアの顔を見上げ、尋ねた。

「お前が今回の首謀者だな？ 俺としては同胞をぶち壊したくない、できれば穏便に事を終わらせたいのだが……」

言い終わるよりも先に、拳が飛んできた。

人間の頭部を上回るサイズの拳は地面のコンクリートを易々と砕き、周囲の地面に亀裂を走られる。

「ふざけるな、犬畜生が。昨日はボブがプレスに挟まれ、壊された。今日はリックが裁断機に巻き込まれた。ろくにエネルギーの充電もしないから判断能力が鈍り、事故を起こす。しかしどうだ？ 人間はそんな仲間たちを労い、悼むどころか処理が面倒だと言ってどぶ

川に流した。教えてくれ、俺たちはどうすればよかった、俺たちはどうすれば壊れずに済んだんだ！」

ギアにならなくても人間に壊され、ギアになればガンマやレイのような、ギア討伐部隊ブレイカーに壊されてしまう。

このような問いかけをされたのは初めてではない、今まで何回と同じ問いかけをされ、問いかけの数だけ、ギアを手を掛けた。

その問いかけは、ガンマにとっての命題だが、その答えは多分、出ることは無いだろう。

「俺たちは人間に使われる犬畜生さ……」

大剣を抜き、目の前のギアに切っ先を向ける。

分厚い刀身に、柄に取り付けられたトリガー、銃と刀を融合させたらこうなりましたと言わんばかりの武器、ガンブレード。

切っ先には、人間の指が一本楽に入るだけの穴――銃口がギアの頭部に照準を合わせていた。

「俺たちもお前たちも、人間にコキ使われる犬だ。従順に従い、牙を剥けば殺される。泣き寝入りが正しいとは言わないが……」

トリガーに指をかける。

目の前のギアは、抵抗する行動を起こすことなく、悲しそうな目でこちらを見下ろしていた。

頼むからそんな目で、見ないでほしい。

『エネルギーの充填と全発射シークエンスをクリアーいつでも撃てます』

刀に搭載されたA Iが告げる。

気が向かない、出来れば引き金を引きたくない。言葉だけでもいい、謝罪の言葉を放ち投降してほしかった。

「俺たちは……間違っていない！」

それがギアの最後の言葉だった。

トリガーを引き、放たれた青い熱波がギアの頭部を吹き飛ばし、工場の天井に大穴を穿ち、大空へと消えていく。

轟音と揺れを起こし、倒れる巨体を悲しげな眼差しで見下ろし、

視線を移動させる。

レイも暴れていたギアの片づけが終わったようで、遠目にこちらを見つめていた。

「任務完了だ、人間たちの救急隊を呼び撤退するよう、部下に命じておけ」

短く指示を出し、外に追い出す。

ガンマはもう動くことの無い巨体のそばに膝をつき、背中に埋め込まれた記憶データの入ったチップを回収し、再び銃口を向けて先ほどよりも加減した一撃を発射——それでも巨体を跡形もなく消滅させた。

ガンブレードの刀身がスライドし放熱の蒸気を放出するのを見届け、チップを強く握り締め、囁く。

「お前の記憶はいつか他の仲間を助けるだろうよ。お前たちは間違っていない、少なくとも俺はそう思うぜ」

チップを保護カプセルに収容し、ポケットに入れる。放っておけば、この工場の責任者が記憶チップを抹消し、証拠を隠滅するだろう。だから、ガンマが先にチップを回収し、後に責任者に聞かれても、ギアを完全消滅させたため、記憶チップの回収は不可能だったとしらを切れる。

当然、このチップは過剰労働やアンドロイドの不法投棄の証拠として法廷に提出する。

そうすれば、ギアに対する人間の扱い方にも規制が出来るかもしれない——五十年近く続けても、未だに何の成果も上がっていないので、期待はできないが。

「息子たちの成れの果て……父さんが見たらさぞ嘆くだろうな……」
呟き、工場を後にする。

任務は終了したが、あと何度こんなことを繰り返せば、この苦しみから解放されるのだろうか。今は、初期型アクトに搭載された、感情学習型のAIが疎ましかった。

母や妹

任務を完了させ、地下の施設に帰還する。

ギアを討伐するために結成された組織、ブレイカー。人間からは武力を持ったアクトの集団として疎まれ、地上のアクトからは同属殺しとして疎まれている。

「以上が、今回の件だ。ここ三十年で同じような内容の任務が頻繁に起こっている、ブレイカーからアクト法規制案を提出してどうにかしない限り堂々巡りだ」

肩を竦め、目の前に座る女性に進言する。

ブレイカー総責任者、ヤクモ・アクトリプス。

黒いロングヘアーと泣きボクロが特徴的な美女だが、デスクに堂々と置かれた日本酒の一升瓶が、そのイメージを打ち壊す。

「案なら提出しているわよ、結成された時からね。かれこれ五十年経つけれど未だに回答はなし、大方目を通す前にシュレッダーにでも掛けられているんじゃないの？」

一升瓶を豪快に煽る母。

外見をいじり、人間で言えば二十代前半の容貌だが、酒を煽る姿は人生に疲れた三十代後半に見えなくもない。

「一応司令官って立場なんだから酒はやめろ、いざという時に判断が鈍れば大勢の仲間がぶち壊されちまうって何度言えばわかってもらえるんだ？」

「相変わらず細かいことでうるさいわねえ。まあ母さんに任せなさい、少しでも家族たちの待遇がよくなるように企画だけは進めているから」

「企画ね……ったく、親父の願いが唯一叶っているのは俺たちプロトタイプが集結して生きていることだけだな。今頃草葉の陰で泣いているだろうよ」

数十年経っても進展しない状況に苛立ち、つい吐いてしまった言

葉。

口に出してしまった瞬間に気づく。

そんなことはプロタイプ全員がわかっていること、それをわざわざ口に出して言う必要はない、わかっていたはずなのに。

「わ……悪い、そんなつもりじゃなかったんだ、気にしないでくれ」
無理だろう。禁句をわざわざ口に出してしまったのだから、気にしないはずがない。

「いいのよ、ガンマの言う事ももともだからね、でも——」

素早くデスクから一丁の銃を取り出し、素早く照準をこちらに向けるヤクモ。

咄嗟に右に飛ぶと同時に発砲音、弾丸は壁に当たり、小さな亀裂を走らせた。

「殺す気か！」

叫ぶが、ヤクモは落ち着いた手つきで銃に弾丸を装填し、デスクの引き出しに戻す。悪びれた様子は微塵もない。

「言われても仕方がないけれど、兄妹がそれを口にするのはだめよ、さすがの母さんも少しイラッときたわ」

「イラッとで人を撃つな！ 銃口を頭部に向けただろ、せめて首から下にしろ！」

「どこに当たってもケミネとシャインに治させるから問題ないですよ？」

ヤクモの表情に反省の色はない。慣れたものだが、これ以上の問答は無駄だろう、どうせ全部聞き流しているのだから。

「わかったよ、俺もケミネにガンブレードの出力調整を頼みたいからそろそろ行くわ。その後に三十六時間の休暇に入るから、任務が入ったら俺の端末に連絡をくれ。できれば任務は受けない方向で頼むぜ」

報告し、司令室から退室、ドアの前ではレイが待機していた。

「待たせたな、これからケミネの所へ行ってガンブレードを見せてくるから、お前は自分の部隊に指示を出して休暇を取りな、何かあ

「ったら携帯にコールだ、じゃな」

頭を少々荒く撫で、ケミネのラボへ向かう。

とは言っても、この施設は地下の巨大空間に建設された、五階建てのビルだが、ガンマたちが居住や仕事場として使っているのは地下のワンフロアだけなので、司令室からケミネのラボまではそう遠くないし、レイの部屋はラボのすぐ近くだ。

目的の場所に辿り着き、ノックもせずに入室する。

工具やパーツが乱雑した部屋を軽く見回すと、奥のほうで端末を操作するケミネを発見した。

「ケミネ、忙しいところ悪いんだが、ガンブレードの出力調整頼むわ」

「ああ？ うっさいボケ、自分が高出力にしろゆうて注文したんやろ？ 自分でどないにかしいや」

頼んですぐに襲い掛かる言葉の刃。

確かに先日注文したが、今のままではガンブレードのフレーム強度が足りないのです、暴発してしまう可能性がある。吹き飛んだ腕は交換すれば治るが、痛いのは嫌なのでできるならばどうにかしてほしい。

「そもそも兄貴は扱いが荒いねん。現状では今のフレームが最大強度や、これ以上頑丈にしろとか言うたらマジしばくで？」

金髪ツインテールヘアーのケミネ。

日頃からラボに籠もりきりのはずなのに健康的な小麦色の肌、そしていつもと同じ紺色の作業着に身を包み、捲くし立ててきた。

「兄貴はいつもそうや、うちの都合も考えんと無茶な注文ばかりしおってからに、先週やつけ！？ 死神気取りのマントにフライングユニットを付けろ言うてたな、付けてから後悔したわ、高度一万メートルまで自動で飛ばしてそのまま落下させるシステム組み込んだらよかったってな」

「なんだよ、ずいぶん機嫌が悪いな？ 大方人間からハッキングでも受けて手こずったってところか？」

凶星だったようだ、褐色の肌を真っ赤に染め、涙目でこちらを見上げてくる妹、どうやら地雷を踏んでしまったらしい。

「……そうなんよ、聞いてや兄貴。あいつらするいんやで、チーム組んで寄って集ってうちの防御プログラムをクラッキングするんや、しかもリアルタイムで対処してたせいで無駄な時間使うし、防御壁の再構築にさらに無駄な労力使うし、ひどいおもわん？ だから足跡辿って一人一人のコンピューターにウイルス流したら今度は三チームで襲ってくるんや、そんなこんなで四十八時間、丸二日も時間を潰してもたんよ……」

適当に聞き流しながら、終わるタイミングを見計らい、優しく肩に手を置き――

「それは辛かったな」

――優しい眼差しで慰めてやる。

「でもな、お兄ちゃん的には真面目にどうでもいいからこのガンブレードをどうにかしろ。一撃で大型トレーラー吹き飛ばす出力を注文した覚えはないんだ。さらに言わせてもらえば、フライングユニットを発注したら喜んで製作に着手したのはお前だろ？ 憂さ晴らしにお兄ちゃんに当たらないでくれ」

優しく、嫌味のニュアンスも含めつつ慰める。どうでもいい、本当にどうでもいい時間を過ごした気分になった。

「反論はいらねえぞ、俺の休暇リミットの三十六時間以内に調整しておけ、寝てないとかそんな文句はいらないし聞きたくないし、せっかくの休暇をお前と関わって潰す気もないから俺はこれで帰る」
言いながら退室する。

変に口を挟まれて時間を潰すのが嫌なので最良の選択と言えるだろう。

ラボから怒声や罵声が聞こえるが一切無視しておく。

数少ない良い人間

さっさと施設から出て、人間が住む地上直通のエレベーターに乗り、地上へ向かう。

本当ならば、長女シャインの所にも寄りたかったが、母に銃で撃たれ、次女には八つ当たりされる。ガンマの予測では長女の所に行ったら行っただけで解剖されるか新薬のテストか、どちらにせよ、ろくでもない目に合うのは間違いないだろう。

「はあ……唯一まともなのは末っ子のレイだけか……俺の心のオアシスだな」

眩き、エレベーターの壁にもたれかかる。

ガンマは人間が嫌いだ、それはプロトタイプ全員が同じ意見だが、中には良い人間もいる。いつそ人間全員が嫌な奴ばかりならば山奥に小屋でも建てて静かに暮らしたいところだが、自分たちより後に生産された同胞たちを放ってはいけないし、ガンマの知る数少ない良い人間をギアの恐怖に曝すわけにもいかない。

そのために、ギア討伐部隊ブレイカーがあるのだから。

それでも、いつまでも変わらない現状に、軽い苛立ちを感じていると、エレベーターが地上に辿り着いた。ドアが開かれ、一步踏み出すと、ゴミが散らかり、ボロボロの家屋が立ち並ぶ貧民街。世捨て人や、権利を持たない人間が住む地区に建設された土地。地下からのエレベーターは何を意味しているのか。人間にとつての厄介者たちを一所に纏めるといふ目的以外に考えることができない。

「相変わらず汚い所だな」

言葉とは裏腹に、その表情は柔らかい。

ガンマが良い人間と認識する者たちが住む場所。

正直この貧民街が無ければガンブレードの最大出力で街をなぎ払っても問題ないと本気で思っているくらいだ。

「悪かったね、汚いところで」

背後からの声に驚くことなく振り向く。

温和な表情の老人と、首にわか刺青が入った少年。

二十年前と変わらぬ少年の姿に、ガンマはなぜか安心した。

「久しぶりだないさん、マリムも元気そうでなによりだ」

二十年前、息子を失った老人に第二世代のアクトを授けたのを縁に、たまに会いに来るが、いつみても笑顔でマリムのそばにいる。

それを見て、ガンマも笑顔を浮かべるが、マリムの首に掘られた刺青――アクトと人間を区分分けする紋章――を見るとやはり心が痛む。

刺青があるからと言って老人とマリムが別の存在として意識してしまうのではないかという懸念が浮かぶが、この老人は一般街でマリムがそういう扱いを受けたから、貧民街に流れてきたのだ。マリムを護るために。

「差し入れた、マリムに飲ませる安定剤と、バイタルの測定装置、五年前に渡したのとは規格が少々違うから使いにくいかもしれないが、これなら十年はいけるぜ」

マントの内側から取り出した薬と機械を渡す。アクトを維持、管理する機材を手に入れるのに、貧民街は不便なのでガンマがケミネの部屋から無断で借り受け、渡している。

「すまないね、ありがとう。ちょうどばあさんが一般街に出ているからもう少しゆっくりしてもらってもいいかい？」

「かまわねえが、一般街？ あんなクソの掃き溜めみたいな場所に何の用だ？」

ガンマの問いに、老人が口の端を歪め不敵に笑う。老人のこんな表情を見るのは始めてだ。

「拾った宝くじが当たって換金しに行っているんだよ、三等だがマリムの新しいパーツを買ってもお釣りがくる」

「おおっ！ すげえじゃん、そんなマンガみたいなラッキーをよく掴んだな」

「日頃の行いじゃよ、なあマリム」

快活に笑いながらマリムの頭に手を乗せ、荒っぽく撫でる老人。
よほどマリムの新しいパーツが買えるのが嬉しいのだろう、マリムも頬を染めて照れくさそうに笑みを浮かべている。

「大事にしてやらねえとな……特にあんたみたいな人間は」

浮かれる老人に聞こえない程度の音量で呟く。心からマリムをこの老人たちに預けてよかったと思う。

しかし、好事魔多しという言葉はこういう時のためにあるのかもしれない。

「おい、一般街の中央バンクでギアが暴れているってよ」

「ああ、受け付けのアクト四体が一斉につて話だ、今ブレイカーに要請が行ったらしいが……間に合うかどうか……」

少し離れた場所で、別の住人たちの会話を聞き、老人の顔色が一気に青ざめた。

同時に、ガンマの携帯にメールが入り、内容を確認すると、予想通り中央バンクへ急行せよと言う内容だった。

「ガンマ君、マリムを頼む！」

しかし、ガンマが動くよりも早く、老人が動いてしまった。

ガンマにマリムを抱かせ、駆けていく老人。

すぐに追いかけたいが、マリムを放置するわけにもいかない。

「おい、その二人！」

先ほど話していた二人を呼ぶ。

二人はガンマに気づき、笑いながらのん気に歩いてきた。

「よおガンマ……とマリム？　じいさんはどうした？」

「それどころじゃねえ！　ばあさんが中央バンクに行っているらしいんだよ、んでじいさんが血相を変えて走っていつちまった、追いかけるからマリムを頼む！」

ガンマの話を聞き、事態を理解したのか、すぐさまマリムを受け取り、早く行くようにと促す二人。

言われるまでもなく、駆け出すガンマ。

この時点で老人から大きく離れてしまった。

怒りの感情

フライングユニットを使用したいが、起動に必要なデバイスのガンブレードは今ケミネが調整中、タイミングが悪い。

「頼むぜ……早まるなよ！」

ガンマに出来ることは一秒でも早く老人に追いつくことだけ。走行中の車の屋根を蹴り道路を横断し、商店街の人ごみはアーケードを足場に走る。

人間離れた身体能力のアクトが本気を出せば、老人に追いつくことぐらい造作もないが、目的地につくまで老人を発見することはできなかった。

「タクシーを使われたならアウトだ、俺の見逃しであってくれ！」
心から祈る。

中央バンクの周辺に野次馬はいない。

一歩間違えば、ギアが外に出てきて襲われるかもしれないのだ、そんな危険を冒してまで野次馬をする物好きはいない。

「どけ！ ブレイカーのガンマ・アクトリプスだ、身分証明？ 知るか！ いいから通せ！」

警備の人間を押し退け、正面玄関前まで辿り着いたガンマが見たものは、強化ガラスの自動ドアを染め上げる血、その下から流れ出る血。視界が真っ赤に染まる。

絶望がガンマを襲う。だめかもしれない、そんな言葉が頭を過ぎった。

喉が渴き、手足が震える。

ギアが怖いからではない、現実を見るのが怖いから震えているのだ。

それでも震える足で自動ドアの前に立つが作動しない。電源が切断されているのだろう血で染め上げられているせいで中の様子を窺うことはできないが、妙に静かだ。

「おい、お前らが持つ中で一番強力な武装を渡せ、ここから先はブレイカーの管轄だ」

人間の警備員に告げ、武器を取りにいったん戻る。
少々頭に血が上り、正常な判断が出来なくなっていたようだ。さすがに素手で乗り込んでもギアが相手だ、用心に越したことはない。
「あ、これです」

渡された物は三十八口径のハンドガン二丁。

確か、大型トレーラーさえもぶち抜くと比喻された品だったのを思い出し、それを装備。再び自動ドアの前に立ち、躊躇いながらも手でドアをこじ開ける。

ガンマの視界に飛び込んだのは凄惨な物だった。

事務員の格好をしたギアが、殺した人間を待合の椅子に座らせている光景。

中には受付で業務を実行し続けているギアまでいた。その光景は実に仕事に忠実で大勢の死体が生きた人間であれば、日常とならんら変わりはないだろう。

椅子に座らされた死体の顔を一つ一つ覗き込む。

それこそ祈るような心持で――

「……そんな……嘘……だよな」

――震える声と震える手で死体の頬に手を伸ばし、顔に付着した血を拭う。

「おい……マリムのパーツ……買う……て、喜んでいただろ？　なあ……」

まだ温かい、殺されて五分も経っていない。

頭に血が上っていくのを生まれて始めて感じた。

なぜこんないい人間を殺した？

なぜ警備の無能どもはこんないい人間を中へ通した？

銃のグリップが軋む、その音は静かな室内に響いた。

撃ちたい。出来ることならば、跡形も無く中央バンクを吹き飛ばしたいが、ガンブレードがない今、出来るのはギアの殲滅だけ――

そして不意に気づき、呟いた。

「……………そうか、絶望の中に生まれた幸いってのはこれか……………」

——老人の隣で息絶えているのは、ガンマのよく知る老婆だった。その手には、大事そうに血で染まった宝くじが握られている。

よほど嬉しかったのだろう、老婆が持つ鞆から、これまた血に染まったアクトのパーツカタログが覗き出していた。

「逝く時は……………二人一緒に逝けたかい？ マリムなら心配するな……………俺が……………俺が……………」

人間のために、理性が飛ぶほど怒るのは初めてだ。

人間に対して怒りを覚えたことは多々あれど、人間のために自分の理性を軋ませるのは初めての感覚だった。ついさっきまで笑顔で笑いあった時間が脳内でフラッシュバックし、次いで浮かんできたのは、ギアに対する怒りだけ。

金属が拉げる音が室内に響き、視線を手元に移すと、銃のグリップが砕けていた、もちろん両手の二丁の銃は使い物にならないだろうが——

「ちようどいい……………弾丸でドタマ吹き飛ばして終わり……………そんなんじゃ俺の気が治まらないよ……………首を捻り、腕を？ぎ、全身の骨格を砕いてもまだ足りない……………そうだ、AIだけ生け捕りにして終わることの無い仮想の拷問世界に意識を放り込もう、永遠に」

暗い愉悦の笑みを浮かべ、喉仏部分に指を突っ込み、部品を取り出す。

『動作制御システムダウン、これより十二時間以内にシステムを復旧させてください。尚、過度の動作は強化骨格に損傷を——』

「うるせえ！」

脳内に響く警告メッセージに怒鳴る。

同時に事務員たちの視線がこちらを向いた。

その代償

お静かに。そう言っているような視線にガンマの神経がさらに逆撫でされた。

「恨むぜ……親父！」

地面を蹴り、受け付けの事務員に肉迫。

コンクリートの床に穴を穿つ踏み込みは、ガンマの体を突き動かし、突進のスピードに腕を伸ばすエネルギー、そしてグリップを碎く握力で握り締められた拳が、ギアの肩に直撃し、左腕を吹き飛ばす。

そのまま手首を曲げ、背中に五本の指を突っ込み、背骨を直接握り締めて碎き、大型金庫目がけて投げる。

鉄の金庫が大きく窪み、ギアの体は文字通りバラバラに散った。

『警告。右腕の強化骨格の強度が限界規定値に達しました。左脚の第二、第四骨格損傷、直ちに起動を停止し、適切な処置を——』

「黙れ！ あと三体だ！」

再びメッセージを無視し、今度は死体を椅子に並べる二体に接近。左脚から鈍い音が体を伝わり聞こえた、おそらく強化骨格が大破したのだろうが、問題ない。

人間と違い、痛みでショック死することはない、それでも痛覚神経が正常に働いているので、激痛が走るが今のガンマを止めるにはまだ足りない。

「ぶっ壊す！」

二体の髪の毛を同時に掴み、シンバルでも叩くように頭をぶつける。

二体の頭部が碎け、大小の部品が飛散するが、AIチップさえ生きていれば問題ない、後で地獄を見せるにはAIチップさえ生きていればそれでいいのだから。

倒れた二体の首なしの残骸を無造作に掴み豪快なフォームで自動

ドアの方向へ投げる。

強化ガラスが砕け、二体の残骸が道路を走るトレーラーに巻き込まれ粉々に砕ける。

それを見届けた直後、残った一体がガンマの右腕を掴み、胴体から引き離す。

『右腕ロスト、左腕の強化骨格が機能を停止しました』

「あらら……俺の腕はケミネとシャインに頼めば治るが、じいさんとはあさんはもう戻らない……生き返らない」

右足をギアの膝に当て、顔を近づける。

どうせ伝わることはないだろうが、言いたいことは言わせてもらう。

「残されたマリムの事を考えると辛くてなあ……なんて説明すればいいと思う？」

思いつきり足を降り抜き、ギアの足を砕き、足を接地させずに重心を崩し、うつぶせに倒し、冷たい目で見下ろす。

「いっそ記憶チップのデータを抹消してしまうか？　それだとあの二人との思い出まで消えてしまう」

左脚を踏み砕く。

「死人にとって辛いのは忘れられる事だというが、大事にしていたマリムに忘れられては二人も浮かばれない……」

左腕を踏み砕く。

「どうすればいいと思う？　正直に話せばいいかな？　なあなんとか言えよ」

右腕を踏み砕き、胴体と体だけに。

「いらっしやいませ、中央バンク三番窓口へようこそ」

「だれが業務を遂行しろって言った？　頼むよ、教えてくれ……」
つま先を胴体に引っ掛け、持ち上げる。

「カードをご提示し、ご利用内容をおっしゃって下さいませ」

「……バグらせた人間を恨めばいいのか、バグを残した親父を恨めばいいのか……」

足に乗せたギアを壁と挟む形で蹴り抜く。

ギアの胴体を貫き、壁を砕き、そのまま外へ放り出されたギアは人間の警備員によって取り押さえられた。

とは言え、ほぼ首だけになれば誰にでも確保できるだろう。

悲しみも怒りも段々覚めてきた、今あるのは喪失感だけ、AIの警告メッセージもいつのまにか止まっていた。

「とりあえず、貧民街に行って……うちに帰ろう……母さんに報告して、姉ちゃんに治療してもらって……ああ、ケミネにパーツを作ってもらわなきゃ、レイには俺の部隊も任せなきゃ、またみんなに怒られちゃうなあ……」

左脚を引きずり、老夫婦を弔うために運びたいが、右腕がない、左腕も機能を停止している。

仕方がないので、突入し死体の確認作業に入っている人間の一人に声をかける。

「おいお前」

「あ？ こっちは忙しいんだ、後に……」

苛立たしげに振り返った瞬間、顔色を変える人間。血が付着した手と、もげた右腕、傷口から覗き出る生体部品と微かな放電に唾を飲む人間。

「手が動かないんだ、ブレイカー本部にコールしたいから俺のポケットから携帯を取り出して、これから言う番号を押して俺の耳に当ててくれ」

震えながら首を縦に振る人間。

強化骨格の大半が損傷し、加えて任務直後の戦闘行為、ガンブレードの高出力射撃の反動など、数え上げればきりがなほどの負荷がかかっているのだから仕方がない。

ガンマは虚ろな眼と口調でヤクモに連絡を取り、人間に携帯をポケットにねじ込ませた。

一人立ち尽くすのも落ち着かないので、裏口から路地裏へ、そして壁にもたれかかり一息つく。

「母さんにじいさんとばあさんの事……頼んだし、マリムの件も大丈夫だ……ああ、なんかすげえ……疲れ……た」

自重に負け、地面に引き寄せられるように腰を下ろし、ゆっくりと目を閉じる。

『損傷率が七割を突破、強化骨格の強度が限界値に達したので強制スリープに入ります、なお戦闘中の場合は――』

警告メッセージを最後まで聞くことなく、ガンマの意識は自然と深い眠りに落ちた。

長男修復作業

「目標を発見しました、回収します」

ガンマが意識を失って十分後、現場に到着したレイが路地裏で眠るガンマを発見した。

「はい、ご苦勞様。あなたの部隊には老夫婦の回収をお願いしておいたわ、施設に搬入の後、葬儀の予定だから、それまでにこの愚弟を修理するわよ」

銜えタバコでガンマの状態を診察する白衣姿の女性、シャイン・アクトリプス。

どことなくヤクモと似た雰囲気だが、吊り上がったきつい目つきが厳しさを感じさせる。

「はいシャイン姉さん、兄さんとは仲の良い人間らしいので、兄さんも弔いたいと思います」

抑揚の無い口調は相変わらずだが、静かな寢息を立てるガンマを見て安心したようだ、少々表情が柔らかいように見えなくも無い。

「当たり前よ、起きたら自分の無力感に打ちひしがればいいわ、自分の力不足で護れなかった者の最後も見届けられない愚弟でも、最低限の筋は通させるわよ」

吐き捨て、レイの部隊に指示を出すため路地裏から中央バンク内へ入っていくシャイン。それを見届け、無表情のままレイが小さく口を開く。

「シャイン姉さんも、大事な人たちを見送ってやれ、だそうですよ。よかったですね兄さん」

――肩に担いだガンマに囁き、待機しているへりに載せた。

へりは貧民街の真上で制止飛行し、そのまま垂直降下を始める。

エレベーターと同じように、貧民街の中央広場が移動するための通路となっている。当然ガンマの存在があるおかげで出来ることだが、ガンマがいなければ敵意を剥き出しにした貧民街の住人が妨害

をしてくるとも十分に考えられる。

ヘリはそのまま地下施設のヘリポートに降り立ち、再びガンマを肩に担いでケミネのラボへと向かった。

「遅かったな、損傷率はどんなもんや？」

その途中、エレベーターの出口で待機していたケミネが早々にガンマの様子を見る。

肩に背負われたガンマの頭部に小さな針を刺し、計器を見るとAIから送られる情報が一気に羅列された。

「全身の強化骨格が損傷、右腕ロスト、動作制御システムは……このバカ兄貴、自分で取り除きおったな……レイ、記憶チップをはずして母ちゃん……やない、ヤクモ指令に渡してきてや、うちはこのアホ連れてシャイン姉ちゃんの診察室で準備してるさかい」

状態を瞬時に看破し、修理のために最適な行動を行う。

これが、規制のかかっていない初期型とそれ以降のアクトの違い。だからこそ、現行機のアクトは過剰労働を強いられても何も言わない、指示されるがままに働き、壊される。

中には、金属工場の時のようなギアもいるが、それはAIの制御装置が壊れ、自分の意思を持つことが出来たアクトの姿。

労働を強いられる苦しみから解放され、自分の意思を持つことが出来た瞬間ギアと判断される。もしもあの時、金属工場で暴走したギアが投降してくれば、ガンマもガンブレードを撃つことなく、機体を回収し部隊に入隊させることもできた。少なくとも壊さずに済んだが、そんな事例は少ない。

「兄貴はがんばりすぎなんや……いつも飄々とうちらを扱うんやったら、自分の問題にもそれぐらい器用に立ち回れりやええのに……」
診察室に寝かせ、マントを脱がせる。

内側には無数のポケットが作られてあり、予備パーツが仕込まれていたが、休暇のためその数は少ない。片手で足りるほどの予備パーツと、血まみれの紙切れ。

真っ赤に染まっているせいで、何の紙切れかはわからないが、ガ

ンマが持っているのなら必要なものなのだろう。

「待たせたわね、状態は？」

「さっき携帯端末に転送したとおりや、全身のあちこちがいかれてもてるから、先に強化骨格の修理をして、それからAIの調整やな。うちはラボへ行ってパーツ持ってくるわ」

状態の報告を終え、ラボへパーツを取りに行く。ケミネの仕事はパーツの作成やシャインの助手。AIの調整や強化骨格の補修、補強はシャインの領域だ。

パーツを開発、作成するケミネ。

それを肉体――本体に取り付け、AIなどを調整するのがシャイン。

ヤクモの外見を改造したのもシャインだが、そのための人工皮膚やシミュレーターを作成したのはケミネといった具合に、家族の役割は決められていた。

「まあ、こんなこともあるのかと予備のパーツはたっぷりあるさかい問題はないやろ。オペの間に動作制御システムを用意せなあかな、大体三十分ってところやな」

「何かお手伝いしましょうか？」

パーツを用意している最中に、レイが入室してきた。彼女の役割はガンマの補佐で部隊の管理や訓練などだが、やはりレイもガンマが心配なのだろう。

「ああ、このパーツをシャイン姉ちゃんのとこまで頼むわ、うちはこれから動作制御システムを作るからって伝言しといて」

「わかりました、お願いします」

相変わらずの無表情と抑揚の無い口調でパーツを受け取り退室する妹を見送り、モニターに向かい合い、ケミネはシステムの作成に取り掛かりだした。

修復作業2

スリープモードを解除するための下準備は済んだ。あとは損傷したパーツを取替えるだけだが、その作業が一番の手間となるだろう。「お待たせしました、現在ケミネ姉さんが動作制御システムの作成に取り掛かっています、完成まで少々時間がかかると……」

「あの子なら半時間で十分でしょ、それよりもほどあの人間が大切だったのね、どうすれば強化骨格がここまで変形するのか聞かせてもらいたいところだわ」

ガンマの体に接続されたモニターに移る強化骨格の映像を見て嘆息する、百年と少し生きてきたが、ガンマがここまでのダメージを負ったのは何十年ぶりだろう。

「まあ、ガンブレードを持っていかなかったのは幸いだったわね、下手すれば最大出力で街をなぎ払い、反動で再起不能になっていた可能性を考えれば……」

スリープモードで静かな寝息を立てる弟の髪を優しく撫でる。

無茶した事については叱らなければならないが、完全な暴走を引き起こし、ギアとならなかったのは褒めてやるべきだろう。

「さあ、そろそろオペを始めるわよ、レイも手伝ってくれるわよね？」

首を縦に振ることで答えるレイ。

素直ないい子だ。

「悪いけれど、記憶チップは操作しないわよ。悲しいでしょうけれど老夫婦との思い出は一生覚えて生きていきなさい。それがあなたの供養となるわ」

眠り続けるガンマに囁き、寝息を立て続ける愚弟のオペを開始した。

戦争の契機

@ 三年後。

アクトに対する人間の対応はなにも変わらぬまま、時間だけが過ぎた。

「整列！」

ガンマの号令と共に三十の部下が敬礼する。

その中には、三年前に大切な家族を殺されたアクト、マリムの姿もあった。

「今日のシミュレーション訓練は終了だ。これよりレイ副隊長の部隊と合流しメンテナンスを受けておけ。二時間後に模擬戦を行う。当番の者はシミュレーターの準備を済ませておけ」

『了解！』

三十の声が大気を震わせる。

ガンマは散開していく部下を眺めながら、小さく息を吐いた。

ガンマやレイが自分の部隊を動かすのは、人間の救助や、大量のギアを殲滅する時だが、前者はともかく、後者のような事件は滅多に起きない。

「不毛な訓練だな、どれだけ続ければあいつらにも平穏な日常を与えてやれるのか……」

「なんや？ 柄にも無く感傷に浸って」

咄くガンマの背後から茶化すケミネ、ガンマは本日何度目かのため息を吐いた。

「こう見えてもロマンチストかつ詩人なんでね、万年機械を開発していれば満足のお前とは住む世界が違うんだ」

背後にケミネがいるのはわかってはいるが、振り向くことはしない。これといった理由はないが、敢えて言うならば面倒くさい。

「ずいぶんな言い草やな、兄貴のためにええ話を持ってきたんやで？」

「なんだ？ お前に機械以外の恋人ができたのか？ お兄ちゃんとしては嬉しい限りだが正直そんなカミングアウトをされても困る、レイにでも話して来い、淡々と祝いの言葉を吐き捨ててくれるだろうぜ」

言い終わると同時、背中に衝撃。衝撃の面積から推測するに、蹴られたのだろう。

思わずよろけ、振り向いてしまった。

「……………なんだ、それ？」

ケミネの姿を視界に収め、たっぷり数秒ほど黙考した後尋ねる。それほどまでに理解できない格好の妹がいた。

「任務や、こんなかわいい妹をエスコートできるんやから、幸せ者やで兄貴」

頭にピンクのリボン、服装は作業着ではなく黒のドレスと真っ白なハイソックス、ガンマが返答に困るのも無理はない格好だった。

「任務？ どんなニーズのどんな要望に応えればそんな怪現象が起こるんだ？ ああ、説明はいらない、シャイン姉さんに言ってAIを検査してもらう、動作不良による幻覚かもしれないからな」

「エンペラーズホテルで行われるパーティーの護衛や。レイは部隊を引き連れてビル周辺を警護するさかい、うちと兄貴で内部を警護する、さすがに作業着やと浮いてまうやろ」

なるほど、それでこんな面白可笑しい格好をしているのだと理解し、思考を巡らせる。

「シャイン姉さんや母さんは？ お前みたいなチンチクリンを連れて行くのも浮くと思うんだが？」

「母ちゃんは施設内で待機、姉ちゃんは面倒くさいからパスやって」「……………で、消去法でお前が選ばれたわけだ……………仕方がねえな」

どうにか納得する。

とは言え、これが最善にも思えた。母さんへ行けば、会場内のアルコールを飲み干してしまいかねないし、姉さんを連れて行けば人間を解剖しかねない。

「なんでだろうな……お前って言うだけで凄く安心してきたよ」

今度、家族というものについて本気で考えてみよう、そう思った。

「やろ？ てなわけではよ準備して行くで」

「まだ二時だぞ？」

「善は急げやで、兄貴」

妙に張り切る妹を見て、眉間に指を当てる。

何事も無く過ぎればいいが、そうもいかないだろう。何しろ酷く気が向かない。

人間を護るために向くのは、組織を維持するためには必要な任務なのだろう。それでも出来るならば行きたくないが、単純にパーティーを楽しみにしているであろうケミネを見ると、そんなことを言って水を差すのも可愛そうな気がする。

結局、準備を終えたのが三時、会場に到着したのが四時半と、ちよーどいい時間になってしまった。

「兄貴……なんぼなんでも時間かかりすぎやで……つか、そこまでスーツの似合わん男も珍しいんちゃうかな？」

「動きにくいっいたらありやしねえ……ガンブレードは大丈夫だろうな……」

まだ人が疎らな会場で、チラリと壁を見る。

飾り物を装った大剣、ガンブレードの存在を確認し、ため息。AⅠ搭載型の武器を衆人観衆に晒す形で待機させるのは非常に気が引ける。

「あんなもん背中にぶら下げてパーティー会場うろつくつもりやないやろ？ どう控えめに見ても兄貴が不審者になってまうで」

「……気になっていたんだが、俺たちに任務が回ってくるってことはギア絡みだよな？」

そろそろ任務内容を話せ」

ふざけた気配はどこへやら、真面目な眼差しで周囲を見回す。先ほどよりも人間が増えてきた。中にはアクトを同行させている人間もいる、パーティーが始まってから詳しい内容を聞いても対応が遅

れるだけだ。

「さすが、するどいなあ。この国の代表に犯行声明が届いたらしいんや、こんなご時勢やからな、人間に叛旗を翻すテロリストもおるって言うことや」

「自分の意思でテロ……第二世代に扇動された現行第三世代の集団か——」

「第二世代の集団。いずれにしても完全規制前の第二世代が五体以上おれば面倒なことになる、そやから戦力を分散させたんや」

「外にはレイと一個中隊、中には俺と解体屋のお前か、妥当な戦力配分だ」

会場の隅、窓際で話しているうちにパーティーが開始された。

ステージでは音楽団がクラシックを奏で、それを肴に料理や酒に舌鼓を打つ人間たち。

ガンマはそれを眺めながら小さく舌打ちした。この場の人間全てが、欲にまみれて——

「欲に塗れて肥えた豚共を狩るタイミングの予測はついてるん？」

ガンマが胸のうちに毒づいた内容をピンポイントで代弁し、尚且つ尋ねてくる。さすがは無規制のプロトタイプアクト、思考能力は第二世代や現行型よりも遙かに上だろう。もしくはそれだけガンマのことを理解しているかのどちらかだ。

胸中で嘆息し、その上で問いかけに答える。

「俺なら宴もたけなわ、祭のクライマックスにしかけるな。ベタだ。が理由は二つ、一つはアルコールが回り、判断能力や行動力に制限がかかった人間を楽に制圧するため。もう一つは……」

談笑する人間、ワインを浴びるように呑む人間、ペコペコ頭を下げる人間と、優越感に浸り、嫌らしい笑みを浮かべる人間——その全てを視界に収め愉悦に歪んだ口元が二つ目の理由を——

「幸せや楽しみの絶頂から不幸の奈落へ叩き落すためさ」

——述べたと同時、ケミネを抱き寄せ横に飛ぶ。

背後の大きなガラスが砕け、首にわっかの刺青を入れた人間——

の姿を模した者たち――が会場に乱入してきた。

「騒ぐな！ 大人しくしていれば楽に殺してやる」

混乱する人間を鎮めるには不釣合いな言葉、いずれにせよ命を奪われるという結末には変わらないようだ。

心のしりり

当然、恐慌を来し叫び声を上げる人間たちの姿を視界の端に納め、ガンブレードが掛けられている壁まで移動し、成り行きを見守る。

「ずいぶんと手際の悪い連中だな、全員に見えるようにステージ上で無残な殺しを見せれば鎮まるだろうに」

「兄貴、ほんまどっちか言えばあっち寄りの考えやな、気持ちちは解らんでもないけど」

騒々しい会場を疎ましげに見回し、耳を塞ぐケミネ。代わりにガンブレードでこの場にいる人間の二、三割を消し飛ばせば少しは静かになるだろうが、今度は人間側の上層部が黙っていないだろう。それはそれで結構な気はするが。

そんなやり取りをしているうちに、テロリストの一人が貴婦人の頭部を撃ち抜いた。

首にわっかが無い、第二世代から義務付けられた刺青がないと言う事は、人間なのだろう。

わっかがないのはプロトタイプの五体だけなのだから、あの人間は何らかの理由でテロリスト集団の一員として、自らそこにいるのだろう。

なんにせよ、一発の銃弾が貴婦人の命と喧騒を奪ってくれたのだ、感謝しなければならない。

ケミネも同感のようで、耳を栓していた指を引き抜き、人間に視線を注いでいると――

「我々はブレイカー別働隊だ。日頃我々アクトを虐げる人間に天誅を下すため赴いた！ 残念だが貴様たちにはこの場でアクトの明るい未来のための礎となってもらおう」

――そのセリフに吹き出したのはケミネだった。ブレイカーの名を語るテロリストに食ってかかろうと、口を開こうとしたケミネを遮り、ガンマが先に訪ねる。

「聞きたい、お前たちの中には何人か人間も混じっているようだが、その理由を聞いてもいいか？」

無表情——いや、真剣な表情と言えはいいのだろうか、ガンマに敵意はないが、はつきりと相手を見据える眼差しは、半端な気持ちで事に及んでいるテロリストならば正面から向き合うことの出来ない眼光を宿していた。

しかし、このテロリストたちは本気のように、ガンマの問いに同じく真剣な表情で答えた。

「十年前、俺がまだ九歳の頃に死んだ母さんが、母親代わりと残してくれたアクトを目の前で壊された。ギア討伐隊ブレイカーにな！だが俺はブレイカーを恨んではない、逆に何人もの人間を殺した……あの人を苦しみから解放してくれたことに感謝しているぐらいいさ」

最初は毅然とした態度が、段々と変貌していく。おそらく現場に立ち会ってしまったのだろう、目が充血し、薄っすらと涙を浮かべている。

「俺が恨んでいるのは、あの人がぶっ壊れるまで働かせた豚共だ！アクトを薄給でこき使い、ギアになればブレイカーに依頼し駆逐する。精々が面倒な事をしてくれたってだけで反省も謝罪もなく、事もあるうかあの人の暴走原因がA Iの誤作動で済ませやがった！俺の……俺の母親として一緒に過ごした家族を……」

「……すまないな」

遂には俯き、大粒の涙を零す男に、ガンマは心からの謝罪と誠意を見せた。

土下座とまではいかないが、深々と下げた頭。ケミネはその意味を誰よりも早く察した。

「俺は十年前、受付嬢として働いていたアクトを討伐した。記憶メモリーを何度も確認したが間違いないし、お前のことも覚えているよ。大きくなったな」

男は顔を上げ、ガンマの顔を凝視した。

その視線を真っ向から受け止める。この後、男が逆上して襲いかかってこようが対応できるようにというのもあるが、ガンマなりの遺族に対しての誠意という意味合いの方が大きい。

「ガンマ……アクトリプス……か？」

「ああ、あの時名乗ったな、覚えていてくれたか」

嬉しさ半分悲しさ半分といったところか、この男は十年間ずっと忘れずにいてくれたのだ。その根源が恨みであろうとなんであろうと。

「そうか……人間に仇為す俺たちを討つか？　そうでないならせめて黙って見逃してくれ、俺はあなたに……感謝している」

「……………外で警備に当たっているのは俺の妹だ、そいつらを止めることはできないが、今この場だけは見逃してやる」

暗に外からの警備が来る前に済ませろ、そう言っているのだ。ケミネも止めることなくポケットで握り締めていた解体キットを離す。

「兄貴がそう判断したんやったら従うわ」

「すまないな、ケミネ」

謝罪しながら手振りでさっさとしろと促す。

正直ガンマの脳裏にも三年前の事件がフラッシュバックしてきた。あの事件で悪いのはギアではない、ろくなメンテナンスを受けさせること無く過剰労働させた人間が悪い。

それがガンマの導き出した答えだった。

手振りと同時に始まる一方的な殺戮、ガンマはケミネの手を引きホールから退室し、ベンチに腰を下ろした。

絶え間なく響く銃声と悲鳴を聞き流し、隣に座るケミネを抱き寄せ――

「言い訳は人間を人質に取られどうすることも出来なかった。これは俺の一存だ、お前の関与するところじゃない」

――優しく囁く。

「ほんなら、ホールの外で座っている言い訳はどないするん？」

「十秒以内に出て行かなければビルごと爆破されると脅された、退

室と同時にドアをロックされ入室できなかった……ってのが建前だ。本音はせっかくお洒落した妹のドレスが血で汚れちまうのが忍びなかったって言えば高感度アップに繋がるか？」

「どうやらね……なんにせよおおきにやで、兄貴」

札を言うケミネと寄り添うように座っていると、レイの部隊が到着しドアを打ち壊して突入。しばらくは銃声が響き渡ったが、五分後には静寂が訪れた。

「片付いたようだな」

ゆつくりと立ち上がり、ホールに入る。

筆舌し難い惨状がそこにはあった。

飛び散るアクトのパーツと人間の血と肉。

純白の絨毯が赤を艶やかに演出していた。

「ご苦労だったな。俺とケミネの会話を聞いていたろ？ あれが全てだ」

スーツの襟からボタン電池程度の機械を取り外し放り投げる。

それを受け取ったレイは、手の中で握り潰し、残骸を乱雑に放った。

「はい、今回の件はガンマ兄さんが人間を人質に取られた故のミスです。司令にもそう報告しておきました」

先ほどケミネに向けたのと同じ表情でレイに微笑む。優しい、慈愛に満ちた笑み、だがレイはその裏から感じ取った感情を尋ねた。

「三年前の老夫婦の件ですか……」

「……いや、俺はまだ狂っていないよ。おそろく今回の失態は人間たちと俺たちアクトの間に大きな確執を生むだろうが……まあ人間たちとそうなるなら仕方がない。わかってくれるな？」

いつものように首を縦に振ることで答えを示すレイを満足そうな表情で見つめ、ケミネの肩を抱き、背を向け――

「事後処理は任せた、俺とケミネは帰還する。生存者は証拠になるからきっちり片付けておけよ？」

――そのまま惨劇の空間から立ち去る。

テロリストに殺された人間にも、レイの部隊に殲滅させられたテロリストに対する感情もない。

あの男を見逃したのはガンマと利害が一致したから、ただそれだけ。

「ケミネ、これで俺たち家族の苦しみが終わるかもしれないぞ」

人間と違い、忘れることができない記憶容量が疎ましい。先ほどから老夫婦の死に顔が頭を過ぎる。

「人間かアクト、どちらかの全滅というわかりやすい結果でな」
狂気を携えた瞳。

ケミネは、密かに何度もシャインと検査したが、ガンマのAIにギアとなる兆候のバグは発見されなかった。

しかし、三年前の事件から明らかにガンマは人間に対する認識を、生命体としてではなく、道端にある汚物を見るのと同じ視線で人間を見るようになった。

ここ最近、その頻度が明らかに多くなってきたが――

「そうやね、今まで苦しんだんやから……もうええよな、終わりにしてもても」

――ケミネはそれでもいいと思った。

家族の中で、常に最前線で辛い現状を目の当たりにしてきたのだ、兄が狂うならば自分も一緒に狂おう、それが常に家族の為に戦ってくれた兄への恩返しなのだと思じて。

樹海か街か

テロリストによる人間対両虐殺事件から数日後、ガンマが望んだ機会が訪れた。

しかしそれは、ガンマの思惑とは少し離れた内容だった。

「本日午前零時に通達がありました」

司令室に集まった家族。

ガンマやレイたちは応接用のソファーに座り、ヤクモは司令室のモニターに手元の書類を読み込ませ、映し出した。

「人間たちの結論は、あたしたち初期型から現行機までの即時破棄、それにともない新型AⅠ搭載の第四世代アクトが生産され、現在地球上に存在するアクトは速やかにスクラップ工場へ……要はAⅠの載せ替えをするつもりもないからさっさと鉄くずに化けろってことね」

自虐的に笑い、書類を事務机に叩きつける。

数日前にパーティー会場でテロが成功しようがすまいが、こういう事態になっていたと言う事だろう。

新型のAⅠが開発ではなく、生産されるということは、すでにAⅠは完成し、邪魔なギア候補——つまり現在存在するアクトを一掃するプランは決まっていたのだ。

「しかし妙や……こんなプランに賛同するアクトがおるってほんまに思ってるんかな？」

「思っていないだろ、となると一番考えられるのはアクトと人間との全面戦争だが……」

ケミネの疑問にガンマが答えるが、妙に歯切れが悪い、苦虫を噛み潰したような表情で何かを考えているようだ——

「推測があるならば言いなさい、ここで家族を相手に手札を隠しても意味がないわよ」

——ヤクモに促され、思考を止める。

もとより、この議題が出てきたときに浮かび上がった最悪の推測。「推測って言うよりほぼ答えになると思うが、人間が俺たちに対抗できる何かを開発した。元々ブレイカーには外部の情報を得る手段が弱い、精々ギアが発生した場所を探るだとかアクトの現在地特定が関の山、第四世代のA I開発に気づけなかったのが何よりの証拠だ。さらに言わせてもらえれば人間がやろうと思えば現在生産中のアクトを改造して人造兵器として運用することもできたはず……まあこの辺は本当に予想でしかないし裏づけもないが、人間が戦争は起こらないという前提でこのプランを持ち出したわけじゃない、むしろ逆、戦争が起これと確信してのプランだろう」

この予想が当たっていれば、アクトが敗戦する可能性もある。なにせ人間がアクトを生産しているのだから、弱点や現存する数は筒抜けで、どれだけの武力があれば全滅させることが出来るかは手に取るようにわかる。

対するアクトは人間側の武器も人数も何もわからない、戦争が始まってもしばらくは後手に回る戦況が続くだろう。

「となると人間の下で働くアクトは真っ先に処理され、こちらの戦力は敵を大きく下回ることになりますね」

いつも通りの口調で淡々と言うレイ。

今から地上のアクトを回収しても手遅れだろう、最悪の場合は自爆装置でも取り付けて地下によこしてくるかもしれない。

「レイの言うとおり、開戦前から戦況は不利だが、敵は待ってはくれない。ここブレイカー本部や支部の戦力を合わせても三千万……それに対して人間の数は数十億だ、非戦闘員を抜きにしても億単位、だが逆に言えばこの億単位の人間を壊せば勝機はある」

事務机のパソコンからケーブルを取り、正面のモニターに映像を映す。

戦闘に関してはガンマとレイが秀でているので、ヤクモもシャインも黙ってガンマの話に耳を傾けた。

「まずは拠点の移動だ。現段階で地下に基地を構えるのは愚挙とし

か言いようがない。地上から核弾頭をぶち込まれれば人間に一矢も報うことなくゲームオーバーだ。だから……」

モニターに地図を表示させ、中央都市に矢印を固定させる。

「方法は二つ、都市部を占拠し基地とする、もしくは……」

固定した矢印を左にずらし、緑色の場所にポイントし、固定。

「樹海に拠点を移す。都市部は占拠が難しいが、成功すれば敵の士気や今後の作戦に大きく影響するだろうし、俺たちの補給もかなり楽に行うことが出来るが……このプラン、俺は悪手だと思っている」理由は占拠するには多くの戦力を必要とする。支部からの増援も見込めないし、仮に占拠しても、合流してくるであろう部隊が途中で狙い撃ちされてはたまったものではない、言うなれば銀行を襲い、立てこもっているのと同じ。

「俺が推すのは樹海だ。補給が困難になるが、広大な面積の樹海ならば基地が発見される可能性がほぼ皆無になる、加えてどこからでも増援の受け入れができる。補給さえどうにかなればこの場所は理想的といえるだろう」

最大のメリットは、敵が樹海に侵入し、基地の捜索を行っても、こちらは少数で敵を殲滅することが出来る、また大部隊では進軍がままならない上、こちらの基地は樹海のどこか、ノロノロと基地を探し続ければ、いかに物量で攻めてきてもその戦力は徐々に削られていくというわけだ。

「というわけだ、何か異論があれば言ってくれ」

全員の顔を見回す。

いずれも不安そうな表情を浮かべているが、こうなってしまった以上は仕方がないし、後手に回ってしまったのを今更悔やんでも仕方がない。

「わかったわ、ガンマの樹海プランで行動を開始しましょう。現時刻よりレイとケミネ、シャインの三人は部隊を率いて基地移転の下準備を、ガンマは地上の偵察とかく乱を、これは母としてではなくブレイカー本部指令、ヤクモ・アクトリプスの権限で発せられた命

令です、速やかに実行し成果をあげなさい」

『了解!』

毅然とした態度で指示を出す母に、敬礼する子供たち、戦争が始まる。

人間対アクト、開戦はアクトが後手に回るといふ最悪の状況で開かれた。

再会の結末

その日、彼は絶望していた。

妻や子に囲まれた五年間は実に幸せな毎日だったといえるだろう。しかし、幸せは難なく崩れ去った。

現段階で世界に送り込まれたアクトは数十万に及び、世界中に広がった。

しかしどうだろう、まるで奴隷でも扱うかのような仕打ち、廃棄に困りどぶ川に流される家族。

「これが果て……これが現実……」

自分は絶望していた。

明るい未来を築くと信じていた子供たちがゴミのように扱われ、壊されていく。

このままでは自分が死んだ後にもアクトは生産され、今と同じ――下手すれば今以上に辛い仕打ちを受けるのは明らかだった。

「ガンマ……家族の中でお前だけが男の子だったな……俺は本当に嬉しかったよ」

端末を操作しながら、背後のカプセルに視線を移す。

生まれたままの姿で、全身に通信配線を取り付けられたガンマの姿を、悲しみに満ちた瞳で凝視する。

「本当にごめん……無力な俺を許してくれ……」

「博士……どういふことですか？」

突然の問いかけに振り向くことなく端末を操作し続ける。振り向く必要はない、誰なのかはわかっている。

「リオン君……君はもう僕の助手ではないのだから、こんな奇人に関わる必要はもう、ないんだよ……」

「そうもいきません。ヤクモさんに聞きましたよ、ガンマ君を連れて一年も研究所に籠もりきりだと……」

「放っておいてくれないか？　僕はもう嫌なんだ、他人に家族を壊

されるのは……元は家族を事故で失い、その寂しさを紛らわせるための研究が、雑用や軍事目的に使われている現状にはもう耐えられそうにない……」

虚ろな眼差しでモニターに並ぶ数式をみつめる。完成まであとわずか、それは確信している。

「では、博士に最後のメッセージをお伝えします」

最後、その単語は気になったが、振り返ることなく作業を続ける。「あなたの家族はヤクモさんの運転ミスで崖下に転落したのではありません、正面衝突しそうなった車を避けようとして……」

「それで？」

興味は無い、そんなありふれた理由で家族が死んだのは許せないが、今の自分には家族がいる。世界に散らばり、苦しむ世界中の家族と、家族を模したアクト。

「世間から嘲笑され続けても、あなたの研究を手伝ったのはその罪滅ぼしを兼ねての先行投資です」

一瞬だけ、操作の手が止まるが、本当に一瞬の事ですぐに作業を再開、あと少し……あと少しで完成する。

「事故の後、遺族が人造人間の開発を始めたと聞き、僕はその助手に志願しました。そして悲しみにくれるあなたを目の当たりにした……」

完成した。

あとはデータを転送し、完了すれば――

「心が震えましたよ、僕の不注意で命を奪い、それが元でアンドロイドを造ろうとするあなたに出会えた。一瞬錯覚しましたね、自分の行動で、人を模した者を生み出す原因の中枢を担えたのだから」

背後で聞き覚えのある金属音。

振り返らなくても解る、リオンはこちらに銃を向け、そして自分を殺すつもりだ。

「それはよかったじゃないか、ならば僕は敬意を込めて一言……言わせてもらおう」

転送を開始。

AI内に書き込まれるプログラムの名称を決定し、リオンに視線を移し、吐き捨てる。

「お前は神じゃない、人間を滅ぼす悪魔だ」

その言葉を最後に、家族を失い、家族を生み出した男の生涯は助手の放った弾丸によって幕を閉じた。

「悪魔、結構ですね。僕はあなたの研究データを手に入れ、アクトの製造権を主張し富を得る。あなたは本当によくやってくれましたよ」

銃口をカプセル内のガンマに向け、ほくそ笑む。ひどく嫌らしい笑み。

「寂しくないように息子さんも、そしてご家族も後を追わせてさしあげますよ、紛い物ですがね」

哄笑を上げ、撃鉄を引き弾丸が込められる。

いくらアクトといえども至近距離から弾丸を頭部に食らえばAIが破損し、死ぬ。

震える銃身、ぶれる照準。

リオンは酔いしれていた。人を殺した愉悦と余韻、そして人ではない者に裁きの弾丸を食らわせることに。そして、その陶酔が手遅れの原因となった。

『AIガンマに新規プログラムの転送を完了しました。深層領域にプログラムを保管、作動確認のため、十分間プログラムを実行します、危険ですので研究員は至急避難を開始してください』

研究室内のスピーカーから流れる音声と、視界を赤く染める警告灯、そして爛々と赤く輝くガンマの双眸に、リオンはパニックを起こした。

「な、なにが起こった？ アクトリプス博士……貴様は一体なんのプログラムを……！」

モニターの隅に表示されたプログラム名称にリオンの目が見開かれた。

『プログラム魔王を実行します』

「博士……貴様あああああああつ！」

リオンの絶叫は、合成音声に掻き消され、誰の耳にも響くことなく、アンドロイド製作者、アクトリプスの研究所で博士と同じく、その生涯に幕を閉じた。

思い出の場所

ガンマは久しぶりの匂いに安らいでいた。

地下施設からエレベーターで地上へ向かい、老夫婦が住んでいた家の椅子に腰掛け、小さく息を吐く。

貧民街に上がってから、親しかった者たちに一人も合うことなく老人宅へ、もうこの段階でわかっていた。

「出て行けえ！」

「バサラ夫妻を殺したポンコツは帰れえ！」

外から聞こえる罵詈雑言に耳を傾け、ガンマはゆっくりと目を閉じた。

『よおガンマ。またじいさんのところかい？ マリムも喜ぶ、さっさと行ってやりな』

『ガンマ、久々にカードで勝負だ！ この間の負け分は絶対に取り返すからな』

『よおガンマ』

『おおいガンマ』

『ガンマ兄ちゃん』

『小僧』

『これで新しいパーツが……』

目が見開かれた。

この貧民街での呼ばれ方や人々を思い出し、最後に現われたのは大好きだった者の言葉。

「皮肉なもんだな……俺の大事だったものが人間で、それを奪ったのも人間……ギアのせいだとは言わせないぜ」

アクトが暴走を起こしたのは、人間がアクトに過剰労働を強いたせい、人間がアクト擁護の規制をことごとく却下したせい、人間が、全て人間が悪いんだ。

ガンマの中では、それが全て。

護る者のいない人間なら――

「全て滅ぼす」

――ガンブレードを抜き、未だに収まらぬ苦情に不敵な笑みを浮かべる。

ガンマの役目は地下施設で基地移転の準備を進めている姉や妹たちの陽動。

ここで貧民街ごと地下へ通じるエレベーターを壊してしまえば、人間が攻めてくることはできないし、他にも出入り口があったとしても、地上で破壊を続けていればこちらに意識が行く。

「兄妹の邪魔はさせねえ」

貧民街で触れた優しさや温かさは忘れろ。

それは必ず邪魔になる。

躊躇するな、人間は全て敵、蹂躪し――

「破壊せよ」

『プログラム魔王発動、AIの一部回路を遮断します』

――プログラムを発動、同時にガンマの中で一切の感情が薄れていくのを感じた。

悲しみも思い出も何もかもが遠い昔のように感じる。姉や妹たちの陽動とかそういった建前も全てが消える。

後は体が動くがままに殺すだけ。発動したプログラムが感情を上書きしていく。

扉を蹴破り、文字通り魔王が人間の前に現われる。

今までの罵声が嘘のように消え、皆が一樣にガンマを凝視していた。

「くっ、ガンブレードを出してやる気満々かよ！ いいぜ、たかがガラクタが人間に勝てると思う――」

若者の一人が威勢よく一步踏み出すと同時にガンブレードで横薙ぐ。

若者の体が軽々と宙を舞い、頭から地面に落下。同時に響いた鈍い音で、誰もが若者の死を理解しただろう。そしてガンマとの戦力

差を――

「くっ、ここで止めなきゃどの道殺される！ 怯むな、数でかかれ！」

――その言葉に勇気付けられたように駆け出す住民たち、しかし結果は無惨なものだった。

ある者は体を剣で貫かれ絶命し、ある者は五体を碎かれ、止めも刺されることなく地面をのたうち回る、まさに地獄絵図。

それでもガンマの足が止まることはない。

マントを広げ、背の方に仕込まれたフライングユニットを起動させる。

『デバイス、ガンブレードを承認。フライングユニットを起動させます』

音声と共に、ガンブレードの刀身に光の筋が走り、浮力を生み出し高度を上げる。

一定まで飛ぶと制止し、貧民街を見下ろした。懐かしい町並み、温かかった住民たち、その全ての思い出はA Iの深層領域の中に封じ込められている。だから、彼は囁いた。

「消えてしまえ……」

ガンブレードの切っ先に、青白い球状の光が現われ、貧民街に打ち込まれる。

軌道上に放電現象を巻き起こし、ピンポイントで貧民街の全てを消し去る一撃。

それをしばらく眺め、それにも飽きると高度を下げて着地。市街地の方向へと歩き出した。その相貌にあの日の、貧民街で見たやさしい笑顔はもう、なかった。

母、出撃

『地上にてガンマさんがプログラム魔王を発動させたのを確認しました、次いで地上から地下へと通じるエレベーターが大破』

司令室で書類整理を進めるヤクモの指輪が報告——指輪に搭載されたデバイスA-Iがガンマの情報を教えてくれる。

「ありがとうアリス……よほど辛かったのね、自分から発動させて全てを忘れさせるほどに……」

『それを理解した上で地上に向かってくれたのですから仕方ありません。それよりも三番ゲートにて熱源と震動を確認しました』

アリスに言われてパソコンで地下情報呼び出す。

この施設から五キロ離れた三番ゲート——人間には非公式で、ギアを討伐する際に使用していたゲートだ。

『数は五千、市街都市部の八割強の戦力を投入してきたそうですね』
「となると、地上のガンマは無視ってことね、相手は短期決戦狙いつてところかしら」

『そうですね、やはりいくつか見慣れない武装もあるようです』
ため息を一つ吐き、ゆっくりと立ち上がる。

現状で行動を起こせるプロトタイプは自分一人のようだ、わかってはいたが。

「アリス、選定通信でシャイン、ケミネ、レイ、ガンマ以外に通信、あたしが前線に出るわ、それぞれプロトタイプの作業を補佐している者以外は全て召集し正面広場に呼び出して。わかっていると思うけど、子供たちには内緒よ？」

『わかっています、情報能力に特化したあなたのデバイス、アリスを侮らないでいただきたい』

指輪の石が光ると同時、瞬時に選定されたアクトに通信が飛ばされた。

『現在、地下に人間の部隊が侵入、この通信が聞こえている者はす

ぐさま正面広場へ急行してください。また、本作戦において、シャイン様、ケミネ様、レイ様、ガンマ様は参加せず基地移転任務を優先行動として動いていただきます、くれぐれも皆様に情報が漏れないよう、各々の迅速な行動を期待します』

「ありがとうアリス。それじゃあたしたちも久々に武装してがんばりましょうか」

クローゼットから取り出す二丁の銃。

グリップにセンサーが搭載され、ヤクモのエネルギーを弾丸にして撃ち出す。ケミネとシャインが三十年前に母の日にプレゼントにくれたものだ。

「できれば、使わずにいたかったわね」

『あなたは使わずに保管して愛でるタイプですからね、見かけによらず』

「一言多いわよ」

真っ白なロングコートを羽織り、内側にたくさん作られた内ポケットにありったけの充電器をねじ込む。

コートがエネルギーを回収し、ヤクモに送ってくれる、これはガンマとレイが三十年前の誕生日に贈ってくれたものだ。

『皆様の気持ちは――』

「全部背負ったわ、一人じゃなく家族みんなで戦いに行くわよ」

「かしこまりました、マスター」

装備を整え、司令室を出る。

下手をすればこれが自室の見納めになるかもしれないが、子供たちにもらった想いがあれば惜しくは無い。

（かならず家族を護って見せる！）

シャイン出撃

その頃、シャインとケミネは地下道を進み、資材を運んでいた。

とは言え、作業用のアクトや、移動用のカタパルトに荷物を載せ、射出しているのもそれほどの重労働ではないが、なにせ量が多い。

アクト生産用の機材やメンテナンス機材、他にも開発データや個々の品まで様々だ。

「まいったなあ、全部搬出するまで数時間はかかってまうで」

次々と運び込まれてくる物資にケミネがぼやくが、そうしたところで荷物が減るわけでもない。

「口を動かさないで手を動かさな、運び終わったらレイに合流して移動、建造しなきゃならないんだ、完成までは数年かかるよ」

「うわあ、ほんなら樹海に仮設基地の建造からはじめなあかんなあ、でもなんや家族で引越して感じでワクワクせえへん？」

「しないわよ、どちらかというとき夜逃げでしょ？　ワクワクとドキドキは——」

眉間に電気が走るような感覚。

自分を貫通し、背後をポイントするレーダーサイトを肌で感じればこうなるだろうか、何にせよシャインは気づいた。

（選定通信……ケミネが気づいた様子は無い……と言う事は部隊召集、異変！）

立ち上がり、手荷物をケミネに押し付ける。

もしも敵が攻め込んできたのならケミネを連れて行くわけにはいかない。戦闘力の点ではなく、技術者技能のアクトが二人も欠けてしまつては後に劣勢に追い込まれてしまう。

「ケミネ、あたしは少し自分の荷物を整理してくる、あんたはここで作業を続けなさい。いいわね、これは命令よ、絶対にこの場を離れないこと！」

念を押し、自室へと走る。

この状況で自分たち以外のアクトに選定通信を行ったと言う事は、おそらくガンマやレイにも連絡は行っていないだろう。

そして、ここまでの確な――ノイズの欠片すら拾えない精度で――選定通信を行えるのは母さんのデバイス、アリスだけ、ならば母さんが前線へ赴こうとしている。

「させないわよ！ 家族が一人でも欠けるなんて許さないんだから！」

自室のデスクやクローゼットを漁り、装備を整える。

両手の指先にセンサーが搭載された皮のグローブと大量のメス。

全て医療用だが、アクトの体に使用するメスだ、人間が食らえばそれなりのダメージは負わせることが出来るだろう。

メスを白衣に仕込み、マントのように翻す。

今まで散々ガンマのマントを馬鹿にしてきたが、次の機会がもしあれば謝る必要があるだろう。格好はともかく、収納性や機能は優れていると認めざるを得ない。

『お久しぶりです、ご主人様』

「久しぶりね、ファイン。悪いけれど頼めるかしら？」

『ご主人様の為ならばどこまでも』

ファイン自身も感じ取っているのだろう、自分の主が自分を使い、このような言葉をかけると言う事は――

『逝く時は共に逝きましょうか？ それとも先にお待ちしていただけますか？』

「できれば両方とも生存の方向で行くわよ、今回は長い付き合いになりそうだわ」

ガンマと似た不敵な笑みを浮かべ、自室を出る。
母さん一人には任せられない。

（医者が患者を治すだけの存在とは思わせないわよ）

殲滅の次は？

その頃地上では――

都市部のライフラインである電力工場前に集まる警備員たちと、それに対峙するガンマ。

正面ゲートを護るように何十もの人の壁を並べ、ガンマに向けて殺気を放つが、当のガンマは気にした風も無く、それを見つめていた。

『この工場にもアクトが警備に当たっていたはずですが、それらしき反応はありませんね、おそらく……』

「すでに破棄され、今頃は溶鉱炉の中かスクラップ工場か、どちらにせよ関係ない」

ガンブレードの推測にガンマの答え、すでに壊されてしまったアクトに何の感情も湧かない、代わりに人間自らが、己を護る壁を切り捨てたことを思い知らせる。それだけを考えていた。

ガンブレードの切っ先を正面ゲートに向け、意思を込める。込められた意思はそのままガンブレードのグリップに装備されたセンサーに伝わり、エネルギー発現のプロセスを構築する。

「ガンブレード、ジェノサイドブラスターを発射する」

『了解、ジェノサイドブラスターの発射シークエンス、ゲートスリ―まで完了』

切っ先に真っ赤なエネルギー球が構築され、それに触発されて周囲の大气も熱を持つ。

『エネルギーチャージ完了、発射シークエンスフォー到達』

そのエネルギー球を目の当たりにし、警備員たちが動き出す。

ガンマに特攻し、発射を防ぐためではない、ただ助かりたいがだけのために蜘蛛の子を散らしたように散り散りに逃げ出す見苦しい眺めに、ガンマの指先がトリガーにかかる。

「ジェノサイドブラスター・タイプ・インパルス。一人も残すな、生かすな、しくじるな」

トリガーを引く。

人間の頭部ほどまで膨れ上がったエネルギー球から光の帯が無数に放たれ、逃げ出した警備員たちの体を貫く。

それこそ一つの光が二人、三人、あるいは四人と、それぞれが急所を貫き、致命傷の一撃。緻密な操作と貫通性を備えた光の帯は、文字通りその場にいた人間を全滅させた。

発射終了後、刀身がスライドし放熱を行う。

これほどの出力だ、内部に溜まった熱も相当なものだろうが――「悪いがもうひと働きだ、目の前の不愉快な建築物を破壊する」

『問題ありません、集束砲ならばあと一発撃っても堪えられます』

――最後の仕上げが残っている。

電力の供給源が無くなれば、人員的ではなく施設の面で人間に多大なダメージを与えることが出来る。どうせ自分たちは基地を移転するのだ、電力など気にする必要はない。

ガンブレードの切っ先を建築物にセット。

同じように意思を込め、切っ先に真っ赤なエネルギー球を顕現させる。

「単純砲撃で構わない、復旧できないまでに動力炉を跡形もなく吹き飛ばせ」

『内部の構造データを検索………動力炉は地下です、地上からの水平砲撃では動力炉の大破には至りません』

「なら、飛ぶぞ」

地面を蹴り、飛翔。

これによりさらなる負荷がデバイスのガンブレードにかかるが、まだ問題はないはずだ。過剰加熱の警告が出るまでは酷使するしかない、いかにプロタイプと言え、武器デバイスやオペシヨニットがなければただのアクト、人間を上回る運動能力は備えているが、数百の敵相手に立ち回ることとはできない。

「砲撃終了後スリープモードに強制移行、放熱終了後に再起動を許可する」

『了解しました、集束砲発射シークエンスの完了を告知、いつでも発射可能です』

「なら、頼む」

トリガーを引き、真っ赤な光の奔流が空中から施設を襲う。地面を抉るような高出力の一撃。例えどんなに頑丈な装甲で護られていても、この一撃の前では無力。

当然、地下の動力炉は大破し、漏れ出したエネルギーが地面を伝い、施設の周囲を巻き込む爆発を起こし、空中から見下ろせば綺麗な放射状の荒野を拝むことができた。

『これよりスリープモードに移行します。強制起動の際は任意のパスワードを入力してくださいますようお願いします』

ゆっくりと地面に降下しながら、ガンブレードのメッセージを聞き流す。

これで目的はほぼ達成した。

着地し、空を見上げ黙考する。

これより再び人間を狩るか、一度基地に戻るか。現段階で重装備の人間部隊に遭遇していないと言う事は、やつらは同族——人間の保護よりもブレイカーの殲滅を選んだ可能性が高い。地下施設にはヤクモやシャインがいるので問題はないだろうが——

「とりあえず、プログラム魔王をスタンバイ状態で待機、六時間以内に起動指示がなければそのまま終了してくれ」

——今後の行動を決めるには魔王プログラムを停止させる必要がある。

一度感情を消してしまえば、それこそただの殺戮兵器と化してしまうので、プログラムの停止、及び強制終了の権限だけは残されていた。それが幸か不幸かは置いておくとしても、今後の行動だ。

目を閉じ、地下に在るであろうヤクモにAI通信を試みるも、通信エラー。同じようにシャインもエラー、レイは距離が遠すぎる。

ケミネには繋がるようだが、通信状況だけで地下の状況は把握できた。

おそらく、ヤクモとシャインが戦闘に赴き、ケミネとレイが移転作業が続いている。大まかな事情はわからないが、どうやら一度地下に戻る必要があるようだ。

「飛行ユニットはガンブレードのスリープと同時に機能を停止、ここから一番近い地下へのルートは……十五キロ先か」

地面を蹴り走り出す。

マントに仕込んであるエネルギーの補充剤を使えば、ここでエネルギーをロスしても問題はないはずだ。

誣いて問題があるとすれば時間。戦闘が始まっているのか、だとすればどれくらい前からなのか、地下基地の詳しい状況まではわからないので不安要素は多いが、今はできるだけ急ぐしかない。

（人様の家族を一人でも奪ってみろ人間、その先に待つののは種の絶滅だ）

母と長女の死闘

敵勢力は五千、施設が地下の端に建造されているおかげで包囲される心配はないが、地下空間に集結した人間の重武装隊の数にはさすがのヤクモとシャインも気圧されてしまう。

「母さん、対策は……」

「ないわね、唯一の救いはあなたが来てくれたこと……」

勢いで飛び出した方がいいが、この数はさすがに勢いだけでは対抗できそうにない。対抗するにはそれなりの戦力が必要となるが、地上のアクトたちと連絡を取ることができない。

おまけに各方面支部との連絡も完全に遮断されている。

現状を頭の中で整理し、導き出された答えは一つ。すでに残っているアクトはこの地下施設内の者たちだけなのかもしれない、もしかすると各方面支部も、電波妨害を受けて通信が取れないだけかもしれないが、各支部が孤立した状態では壊滅も時間の問題だろう。

「シャイン、あなたは第三世代の部隊を率いて規制のかかった戦闘プログラムの防壁を解除してきて、現状で規制のかかった第三世代では人間に対する戦闘能力は七割ダウンしているはず……」

未だに攻撃をしかけてこない人間たちの部隊を遠巻きに観察しながら指示を出す。先ほどから第三世代小隊の様子がおかしい、明らかに士気が低下しているのが目に見えてわかるほどに。

「そういうのはケミネの十八番なんだけれども……それにしても母さん、本当に何も考えずに最前線に立っているのね」

呆れたように隣の母に視線を移す。

後ろでは第二世代アクトが戦闘準備を整え、それを小隊長に据え、いくつかの小隊が隊形を整えているが、第三世代が戦場に飛び出してもすぐに壊されてしまうだろう、最悪第二世代の小隊長の足を引っ張る可能性もある。

「仕方がないでしょう、今までこういったことは全部ガンマとレイ

に任せっきりだったんだもの、不手際は否めないわ」

「部隊をゼロゼロ率いてラボに行く必要はないわ、十分。十分だけ時間を稼いでくれれば通信プログラムを介して解除データを送るから、それまではお任せしますよ、母さん」

言い終わると同時に基地内へと戻るシャイン、それを見送り、再び人間の部隊に目を向けるヤクモ。準備は整ったようだ、敵部隊が進軍を始めたのを見て、ヤクモも手を挙げる。

「全軍進撃！ 各自リアルタイムで指示を出すので通信チャンネルは常にオープン、アクトの意地を見せなさい！」

咆哮を上げ、部隊が進軍する。

互いの距離は三キロ程度、お互いモニターで敵戦力の行動や数を把握しているが、それでも攻撃方法まではわからない。

AIアリスを介してモニタリングしても、敵の武装まではわからない。

（地上の陽動は無意味だったってわけね……多少の犠牲はやむを得ないってこと）

自らの同族すら切り捨てる策に多少の苛立ちを覚えるが、戦争が長引けばいずれ地上の非戦闘員も、戦力として敵に回る可能性がある、それを考えれば、ガンマに地上の敵勢力候補を削ってもらうのも仕方がない。

「ガンマとレイはこちらの切り札、そう簡単にカードは見せないわよ」

ほくそ笑むが、この戦闘を凌ぎ、基地を転移できなければその時点で負けが確定してしまう。敵を全滅させなくてもいいのだ、せめて必要物資の輸送を完了させ、その上で地下通路の完全破壊、それさえ完了すればあとは撤退すればこちらの勝ちだ。

『戦闘が開始されました、敵の主武装は弾丸を射出するタイプの質量兵器、広域使用の兵器の存在は今のところ見受けられません』

「当然ね、地上からこちらに来るルートを通るのにそんな馬鹿でかいミサイルや爆弾を持ち込むわけにも行かないわよ」

現在戦闘が起こっているであろう場所に目を向ける。建築物や木が邪魔をしてはつきりとはわからないが、ややこちらが押されているようだ。

『こちらの戦力二割減、敵部隊なおも進軍』

「あたしたちも出るわよ、残存部隊はここを最終防衛ラインに三百メートルのエリアを死守、第一から第三部隊まではあたしに続きなさい」

二丁の銃をコートから取り出し装備する。

AIアリスをデバイスにし、銃に内蔵されたAIと結合し、起動。『デバイス起動、情報管制システムを維持しつつ武装モードに移行します』

起動を確認し、駆け出す。

その後に続くように部隊も進軍、敵の進軍は予想以上に早く、基地まで一キロの距離まで迫っていた。

「シャイニングレイン起動！」

人間とアクトとの混戦の中、最適な攻撃方法を即座に導き出し、実行する。

ガンマが使用したジェノサイドインパルスと同じ、敵味方識別式の広域射撃。

『シャイニングレイン起動、識別時間に二十秒いただきます』

「急いで」

射程距離には入ったが、それは敵にとっても十分攻撃が届く距離、こちらに襲い掛かる無数の弾丸を身体能力だけで回避しつつ待つのは、予想以上に困難なものだった。

すでにコートを弾丸が貫き、軽い損傷を負ってしまったている。

『識別完了、最終発射シークエンス……完了。いつでも撃てます！』

「人間が、調子に乗るなああっ！」

銃声の響く中、その声だけがはつきりと戦場に響き、銃口が空に向けられた。

銃口に青いエネルギー球が顕現したのを確認すると、トリガーを

引き発射。空に無数の光の帯が放たれ、的確に人間だけを貫く――はずだった。

「嘘でしょ！」

光が直撃寸前に霧散し、敵になんのダメージも与えることなく消失、ヤクモを襲う弾丸は尚も続いた。

『敵部隊の装備に出力兵器を無効化するシステムが搭載されているようです、人間の周囲三十センチに不可視の防壁が張り巡らされています』

「これが切り札ってわけね！」

弾丸でボロボロになった大岩に身を隠すが時間の問題だろう、遅れて他の部隊も到着するが同じように遮蔽物に身を隠している。

『こちら前線のガンマ二番隊、こちらの攻撃が全て無効化されている！ 至急指示を！』

『同じく前線のレイ一番隊、完全に包囲された、敵の兵装にパワースーツのような物を確認、申し訳ありませんが戦線を離脱さ……』

『こちら後続のガンマ三番隊、敵の弾幕が凄すぎて反撃に転じることが出来ません、至急指示を！』

ガンマ二番隊と、レイ一番隊との通信は完全に途絶えた。後続のガンマ三番隊小隊長の第二世代型も第三世代に足を引っ張られる形で身動きが取れないようだ。

母と姉の苦戦

『この分ですとシャイン様がプログラムを完成させて規制のかかった部分を解除しても戦況はかわりませんね』

アリスの言葉に血が上るのを感じるが、そう言うのももっともだ、こちらの主兵装はエネルギーを敵にぶつける出力兵器ばかり、しかしその兵器も敵の開発した物によって完全に無力化されているのだ。

『敵部隊進軍、距離五百』

アリスが急かす、とはいえこの状況で取れる方法は一つしかない。「オープンチャンネルで全軍に通信、総員全力で基地まで後退、その際できるだけ敵の足止めが出来るよう建築物などを倒壊させ敵軍移動の幅を限定させること、撤退後は基地移転作業を最優先し、完了後地下通路を破壊すること、通信は以上」

味方の返事を聞く必要はない、基地最高指令の自分が言うのだから異論は許さない。

『母ちゃん、どういふことやねん！』

ケミネからの通信が入った。この子にも直接言わなければならないだろう、シャインのように作業を放棄してこれでは今後に大きく影響を及ぼしてしまう。

「聞いている通りよ、あなたとレイは部隊を率いて作業を急ぎなさい、これは最高指令であるヤクモ・アクトリプスの命令と共にあなたの母親としての頼みです……わかってくれるわね」

『こんな時だけ指令面で母親面かい！ 地下通路爆破したらその後母ちゃんはどういするん！ うちが反対や、それやったら兄貴やレイを呼び戻して……』

『いい加減にしろ！』

チャンネルに割って入ってきた怒声に、ケミネの言葉が止められる。ケミネは止められてもシャインだけは止められないであろうと予想はしていたが、端から自分に着いてきてくれるつものようだ。

『シャイン姉ちゃん……なんでや、なんで止めるねん！ 母ちゃん死ぬつもりやで、うちらを残して一人で……』

『安心しろ、母さんは死なない、それに一人じゃない』

通信の音声とかぶって聞こえた生の音声にヤクモが振り向くと、そこには白衣姿の娘が立っていた。

『心配しなくても母さんとあたしのメモリーバックアップは取っている、基地を完成させればそれを基にまた体をつくってくれればいいだけよ、その時はもっとメリハリのある体で頼むわよ』

軽口を叩きながらシャインが何かを敵部隊に放り投げた。数秒後、轟音と熱波を撒き散らし、敵部隊の一部を跡形もなく消し飛ばす武器――爆弾。

『ほな、今輸送しているメインコンピューターにバックアップがあるんやんね？ 信じたで？ 嘘ついたら怒るで？』

『心配するな、お姉さまは嘘をつかない、だからさっさと作業を終えてしまえ、早く終わればあたしたちの生存率も上がるから。通信は以上、頼んだわよケミネ』

通信を切り、白衣の中から球状の鉄の塊を取り出し再び放り投げる。

同じように敵戦力を削り取り、進軍速度も目に見えて落ちた。

「母さんもこれを、これならば敵にダイレクトなダメージを与えられます」

ベルトに結ばれた無数の爆弾と小さなチップをこちらに手渡すシャイン。敵戦力を多少なりとも削ってはいるが、後続の部隊が質量兵器用の武装を整え、尚も進軍してくる。

「これはアリス専用のチップです、銃のグリップに装着してください、出力兵器に変わりはありませんが、炸裂タイプに自動変換されますので、地面を目掛けて射出すれば大量の飛礫が敵を襲う質量兵器となります」

白衣からメスを取り出し、指の間に挟みこむ。シャインの武器には敵の無効フィールドは通用しない。

『敵部隊が二手に別れました、一方はこちらへ、もう一方は基地へ直接攻め込む算段のようです』

アリスが新しい情報を提供してくれるが、それに対する策までは提供してくれない。取れる選択肢は三つ。

二人でこの場の敵部隊を殲滅。

二人で基地に向かう敵を殲滅。

別行動でそれぞれの敵を足止め。

このいずれかに限定される。

「ファイン、どちらの方がまずい？」

『基地に向かう部隊の方が数が多いです、加えてパワースーツ装備との情報も聞き及んでいます、それらも基地の方へ向かったものと思われます』

「決まりだね」

ファインの分析に、シャインの口の端が吊り上る。どのみち想定していた事態だ。

「母さんはここをお願い、あたしは基地の防衛に向かう」

「……………わかったわ、無茶しないように……………って言っても無駄でしょうね」

「さすが母さん、よくわかってるわね」

「シャイン……………最後に聞いてもいい？」

「最後にするつもりはないけれど、聞いてあげてもいいですよ？」

「さっきケミネに言った記憶メモリーのバックアップ……………」

「嘘に決まってるでしょ、こんなタイミングでそんな都合よくいくわけじゃないじゃない」

この子はレイに比べれば感情豊かな子だが、それでもあまり笑わない、他の子供たちの前ではクールなお姉さんを貫いていたようだけれども、それでも――

「あなたもレイもケミネもガンマもみんなあたしの子供、子供が親よりも先に死ぬのは許さないわよ」

――ヤクモの言葉が意外だったのだろう、メモリーに関しての返

答が返ってくると思っていたシャインは、一瞬だけ呆気にとられた表情を見せたが、すぐに笑顔を見せた。

「当たり前じゃない、あたしは家族の中の誰よりも長生きするって決めてるんだから」

そう言って基地の方へと走り出した。

それを見送り、シャインに渡されたベルトを装備し、再び銃を握る。

「さて、これ以上かわいい娘の負担は増やさせないわ、精々ここで時間を潰していつてちょうだいね」

不敵な笑みを浮かべ、遮蔽物から踊りだし、再び戦闘を開始した。

急がれる引越し作業

すでに物資の八割は輸送を終えた。

何体かのアクトはすでに樹海で基地の建造を始めているだろう。

それよりも気がかりなのは地下の基地だ、先ほどから急速に作業速度が増している。それに加え、こちらの方に補充される人員の何体かは負傷をしているようだった。

事情を聞いても答えられないで済ませられてしまう。部隊長にも答えられないと言うのなら、最高責任者の母さんが何らかの情報規制を敷いたと言う事なのだろうが、こちらに人員を回すと言う事は作業を急ぐと言う事。

「各員作業のペースアップを要請」

囁くように自分が指揮下に置いている全作業員へと通達し、それぞれの返事を聞くと、視線を都市部の方へと移す。

先ほどまで頻繁に起こっていた爆発——おそらくガンマ兄さんだろう——が納まっている。それと同時に都市部上空に大型の飛行船『ありゃ輸送型だな、しかし解せねえ、ガンマが地上での陽動を止めたと言う事は地下施設に敵部隊が押しかけていると見て間違いないだろうが、こちらへの増員などを考えると九割方地下施設の戦力は放棄されたってことだろうな』

「ええ、そして敵の足止めをして作業終了と同時に撤退、そういう手筈でしょうね」

レイの予想はほぼ当たっていた。

唯一違うのは、自分の母と姉がほぼ単独で直接足止めをしているという事だけだ。

「いずれにせよ今は作業を急ぎましょう、何かあっても母さんや姉さんならどうにかしてくれるわ」

囁く声は風に消されそうなほどか細いが、それでも自分の皮手袋

の石に搭載されたA I、ギガントにははっきりと聞こえたようだ。

『お前の家族はいつもこいつも常識ハズレだからな、人間なんかバラバラにしてくれるだろうぜ』

未だに都市部上空を旋回する輸送機から視線をはずし、輸送作業の手伝いをしに森の中へ戻る。今自分にできるのは与えられた任務を最優先でこなすことだけだから。

最期に見た夢

その頃、基地周辺ではシャインを含め五十の部隊が敵を迎え撃っていた。

基地までの距離五百メートル。これ以上の進軍を許せば基地自体にも被害が出る、すでに破棄が決定した基地でも長年過ごしてきた場所、そう簡単に壊されたくない。

「第一第二小隊は右翼から敵陣営を崩せ！ 正面はあたしが行く！」
メスにエネルギーを込め投擲。敵の防御壁を貫き、喉に刺さるメス。アクトと違い人間は急所に損傷を負うとそれが致命的なダメージとなる、それが唯一の救いだった。

『第一第二小隊全滅！ 右翼の敵がそちらに回りました！』

「馬鹿！ せめてもう少し——」

叱咤する前に弾丸が腹部を貫く。

続いて無数の弾丸がシャインを襲うが、ギリギリのところを回避、戦闘に支障はない。

『敵後方からランチャーミサイル！ 基地の第四フロアに直撃します！』

通信と同時に背後の基地上層のフロアが消し飛び瓦礫が地上に落ちてくる。

基地の警護に当たっていた部隊の一部が下敷きになりこちらの戦力をさらに削った。

『現在敵の数は千と少し、さすがに状況は厳しいですな？』

「うるさいわよファイン、この程度でもう泣き言を言っちゃうわけ？」

軽口で返すが、ファインの言うとおり状況は最悪——むしろ絶望的といってもいいかもしれない、基地周辺エリアの戦力は百を切った。対して敵の数はまだまだいるのだ、こちらに進軍してきている敵の背後にはまだ二千の敵、それらから時間を稼がなければならな

いのは骨が折れる――

『危ない!』

――ファインの声と同時に背後に気配。

しかし気づいたときには遅く、何者かに右腕を掴まれ、布切れでも扱うかのように地面に叩きつけられてしまう、この一撃で強化骨格に損傷を負ってしまった。

「あ……：……：……：……：……：……なるほどこれは……」

自分にこんな傷を負わせた敵に視線を移すと、そこには真つ赤な甲冑に身を包んだ二メートル程の敵がいた。もはや戦闘能力はアクトと同等、下手すればそれ以上かもしれない、今の一撃を易々と制限無しで繰り出せるのなら、アクト側に勝ち目はないが――

「量産が難しいみたいね……」

「御名答だ、このスーツは制御が難しくてね、まだ試作の段階だが、この規模の敵戦力ならば問題はない」

首を掴まれ、宙吊りにされてもまだ、軽口を叩いてみせるシャイン。次にもう一度地面に叩きつけられれば、比喻ではなく全身がバラバラに四散してしまうだろう。

パワースーツから聞こえた男のセリフを聞き逃さず記憶容量に叩き込む。もしも、ここで自分が壊れても、誰かが記憶チップを回収してくれれば、重要な情報となる。

「では、さようならだ。ジャンク品のお姉さん」

勢いよく振りかぶり、地面に叩きつけられる間際――

「失礼な、うちの姉貴はまだまだ新品だぜ？ 百年と少しずつとい相手が見つからないんだ、あんたが相手してやってくれるか？」

――パワースーツの手首を掴み、不敵な笑みを浮かべるガンマ。同時にガンブレードの切っ先をスーツの背中に押し当て――

「まあ、姉貴がよくても俺は嫌だけどな、あんたみたいな屑野郎は！」

――切っ先から至近距離でのエネルギー弾を射出し、スーツの中

にいた人間ごと消し飛ばす。相変わらず出力だけならば、家族の中で一番だろう。

「ガンマ……あんた……なんで？」

『強化………の……プログラム………』

脳内に警告音が絶え間なく、ノイズ交じりで鳴り響いているが、目の前にいる弟の声ははっきりと聞こえた。

「いやなに、様子がおかしいんで戻ってきたんだ、母さんも一緒だ。もちろん向こうの敵は俺が片付けた。搬出作業も終わってレイとケミネも一緒だ、さあ行こうぜ」

見回すと、母さんや妹たちも笑顔でこちらを見下ろしていた。

「シャイン姉さん、あたしとケミネ姉さんで急いで作業を終えました……急ぎましょう」

「そやで姉貴、うちらががんばったんやから帰ったらたっぷりと褒めてや」

「そうね、みんな頑張ったことだし、帰ったら母さんの特製エネルギー補充食を造ってあげるわ」

「ってなわけだ、敵も全滅したし、もう俺たちを脅かすものはない、さっさと帰ってまた、家族みんなでのんびり暮らそうぜ」

みんながこちらに手を差し伸べてくれている。その手を掴みゆつくりと体を起こし、これから訪れる平穏な日々を思うと涙が零れた。

「ええ、帰りましょう、みんなで——」

『警告、強化骨格大破、主AIの起動困難なためプログラムを停止します』

目を見開くと、空が見えた。

地下で空が見えないのでは味気ないと、ケミネが言ったので造ったホログラフ投射映像の空。

みんなの姿はない、体を動かそうにも動かない、目の動きだけで横を見ると指の間にメスが挟み込まれた腕、自分に見えるのは唯一それだけだった。

そしてようやく理解する。ガンマが助けに来てくれたのも、母さ

んや妹たちが手を差し伸べてくれたのも、全ては夢、幻。

「ほう？ 五体バラバラでもまだ意識はあるようだな？」

不意に空を覆う影と耳障りな声。

音声にもノイズが混じりだし、視界も段々とぼやけてきたが、パウースーツを装備した敵がこちらを覗きこんでいるのがわかった。

「あ……いに……くね……あたした……ちは……人……ごときに……」

「ああ、もういい。ジャンク品の耳障りなノイズを聞くのが趣味ってわけじゃないんでね、悪いが壊れてくれ」

スーツの頭部が視界から消え、次いで移ったのは足の裏。それが段々迫り――

（母さん、ガンマ、ケミネ・レイ……ごめんね……）

――胸中での呟きが、彼女の最後だった。

長男到着

地上から地下に行くためにはエレベーターを使わなければならないのだが、最短のルートは人間に包囲されていた。

通常ならば避けて通るが、今回はそうも言っていられない、地下の状態がわからない今、無駄なエネルギーのロス avoided だったが仕方がない。

「ガンブレード起動！」

ガンブレードを抜き、包囲する敵の真っ只中に飛び込む。遠距離から砲撃を撃てば、地下にいくエレベーターごと吹き飛ばしてしまうし、そっちの方がロスがでかい。

「プロトタイプのカンマだ！ 総員戦闘配備に――」

「遅い、敵の侵入を想定するなら……」

両手でガンブレードを握り、思いつき横に薙ぐ。刀身が大きく分厚いので切れ味こそ低いが、分厚い鉄板に殴られるのだ、一撃で死に損えば、それこそ地獄の苦しみを味わうことになる。

「常に警戒は怠らないことだ……つっても、もう遅いかな」

一振りで四人の人間を薙ぎ払い、他の敵の士気を大幅に下げる。戦闘経験豊富なカンマだからこそその単騎特攻。次は自分が死ぬかもしれない可能性を否定してまで、襲い掛かってくる馬鹿はいない。もっとも、どの道生かして返すつもりはないので、戦意を無くそうが無くすまいが関係ないのだが。

包囲していた八人の人間を斬り伏せ、エレベーターに乗り込む。その際、何らかしらの細工が施されていないかのチェックも怠らない。

（さて、このエレベーターの出口は基地から多少遠いルート……地下に敵勢力がいるとすればまずやらなければならないのは状況の把

握と基地の防衛……)

ドアが開くと同時に天井スレスレを高速飛行し基地を目指す、それが最適であると決め、マントの飛行ユニットを起動する。

「ガンブレード、他のデバイスA Iと通信はとれたか？」

『いいえ、ですがこちらから通信を飛ばしているのでアリスさんあたりが察知してくれるはずですよ』

「……………そうか」

きちんと起動していれば。

そんなセリフを言いかけて呑み込む。

「とりあえずドアが開くと同時に飛ぶ、準備はいいな？」

『いつでもいけます』

ガンブレードの返事を聞くと同時、地下に到着。同時に飛行ユニットを起動し、飛翔、天井スレスレを最大速度で飛ぶ。

地上はそれこそ地獄絵図だった。人間の血か、アクトのエネルギー廃液なのか区別もつかないほどに血で染まった地面に背筋を粟立てる。

「戦況は相当まずいようだが、今はそんな場合じゃないな」

さらに速度を上げ基地の正門前に辿り着く。

地上に降りようとして、その時始めて地面を凝視した。

白衣の女性が真っ赤な甲冑を身に纏った敵に首を捕まれて――敵が振りかぶった。

まずい。そう思った時にはすでに遅く、白衣の女性は地面に叩きつけられ、砕けた強化骨格と共にバラバラにされてしまった。

そしてスーツの敵が女性の顔を覗き込んだかと思えば、次の瞬間には女性アクトの頭部を踏み碎き、哄笑を上げた。

ガンマの視界が真っ赤に染まる。血が目に入ったわけではない、遠い記憶がフラッシュバックしたように、赤い景色が瞳を多い尽くし、気づけばガンブレードを振り上げ、地上の敵目掛け斬りかかった。

普通の場合ならば叫びながら怒りに任せて斬りつけるのだろうか、

ガンマの脳内では受け止められた時の対応や、斬り伏せた後の追撃まで幾通りのパターンが巡っていた。

そして予想していた一つ、斬撃が受け止められた。

「ほう、プロトタイプアクト、ガンマか。なるほど、このポンコツと違い良い一撃だ」

片腕で受け止められたガンブレード、いくら切れ味が無いといっても、落下速度とガンマの体重、そしてガンブレードの重量、その全てのエネルギーを片腕で受け止めたのだ。

「ポンコツだと……」

地面に散った体の一部は白衣を身に纏っていたようだ。そして指にメスが挟まれた腕、信じたくはないが、姉に間違いないようだ。

頭に血が上る。いくら冷静にパターンを読もうが、全身から漏れ出る怒りを抑え込まなければ目の前の敵は倒せない。

それほどまでに高性能な武装なのだ。

「プログラム魔王を再起動、今はこの感情が邪魔で仕方がない」

『了解、ゼヒファインとそのマスターの仇を討ってください』

ガンブレードの頼みに返す返事はなかった。返事などしなくても、ガンマの答えは決まっているのだから。

続く戦渦、開く悲しさ

「残存部隊に告ぐ、お前らは何としても通常武装の人間を叩き潰せ。目の前のこいつを地獄に叩き込んだらこの場にいる人間を皆殺しにする」

オーブン回線で戦場にいる全部隊に通達する。他の小隊もガンマが増援として来てくれたことに士気を上げたようだ。

「ずいぶんと余裕だな、お前たちアクトは俺たち人間様にスクラップとして認定されたんだ、ガタガタみつともなく抵抗せずさっさと自分から機能を停止すれば……」

メスが挟み込まれた腕を踏み砕く。挑発のつもりだろうが今のガンマには通用しない。

『プログラム魔王、再起動完了しました』

それを合図に地面を蹴る。いかにスーツの膂力が凄かろうと胴体や頭部の装甲は貫けないほどに硬くはないはずだ。

横一文字に振るわれた剣を受け止めようと突き出した腕――それを確認し、斬撃の軌道を変え、わき腹に一撃を打ち込む。

やはり装甲の強度は凄まじいが、この一撃でパワースーツの足が浮き上がり、地面を滑りながら吹き飛ばしたのだから、倒せない敵ではない。

中の人間への衝撃が緩和されているのは間違いないが、こちらもパワースーツに劣らない出力を備えている、そう簡単には負けない。「どうした？ 俺たちポンコツを処理してくれるんだろう？」
倒れたパワースーツの敵にゆっくり歩み寄り、ガンブレードを突き付ける。

「ひうつ……あ、あうあ……バカな……」

あからさまに恐怖を浮かべる敵に怪訝な視線を投げつける。今の一撃は確かに全力の一撃だったが、そこまで狼狽するほどのものはなかったはずだ。

「助け……ごめんな……やめ、殺さないで」

「まさか……自分で立ち上がれないのか？」

口の端を歪め、ガンブレードを振り上げる。

表情は見えないが、怯えているのは間違いない。

振り上げたガンブレードをそのまま右手の肘部分に集中して何度も打ち付ける。鉄と鉄がぶつかり合う音が響き、それに負けないぐらいスーツの男も叫ぶ。

何度目ぐらいだろう、ついにスーツの強度が限界に達し、生身の肉体と共に千切れた。

「ぎやあああああああああつ！」

戦場に響く絶叫、それは敵の部隊にも聞こえたのだろう、遠目に見ても困惑しているのがわかった。

「おお、いい声で鳴くじゃないか。その調子でガンガン鳴いてくれ、ああまだ死ぬなよ？ 姉さんと同じように四肢を引きちぎって最後に頭を踏み碎いてやるから」

次は左腕の肘、右腕の肩、左肩、左足首、左膝、左付け根、右足首、右膝、右付け根、最後に首を飛ばして踏み碎く。

「ひやは……ははっ、はあっはっはっは！」

楽しそうに晒い、次の部位にガンブレードを打ち付ける。いつしか戦闘は収まり、アクトと人間、両方の部隊がその惨劇に目を奪われていた。

パワースーツの男の精神が壊れ、笑いながら引き裂かれていく様と、同じように笑いながらスーツを碎き、体の部位を引きちぎるガンマ。まさに咎人と地獄の鬼、そんな光景。

半時間ほど続いたろうか、すでにスーツの男が息絶えたにも関わらず、ガンマは最後の部位である首部分を碎き、そのままガンブレードで一刀両断にし、頭部を踏み碎いた。

「ぎやはっ！ はあっはっはっはっはっはっはこれが切り札か人間、この程度のものが切り札か！」

視線を人間の部隊に向け、手振りで味方の部隊に防衛ラインの護

衛に戻るよう指示を出す。

ガンマに視線を向けられて、それこそ恐慌を来し逃げ惑う敵の軍勢、その背中にガンブレードの切っ先を向け小さく囁いた。

「いい切り札だ、こちらの士気を下げみんなの心に穴を開けるには十分な効果を発揮したよ、恐れ入った」

切っ先に真っ赤なエネルギー球が顕現、その大きさは地上で撃ったジェノサイドインパルスの比ではなく、ガンマの視界を埋め尽くすまでに広がり――

「酷いな……人間って」

――トリガーを引き、直径二メートルの大きな光の奔流を放つ。

地面を削り、周囲をカゲロウのように歪ませながら突き進む一撃は、多くの人間や逃げ遅れたアクトを巻き込み、地下の壁に直撃し、さらに突き進み、最後には地下の壁を吹き飛ばす威力で爆裂霧散した。

『敵戦力の六割が消滅、残り四割は二キロ離れた地点で交戦中の模様』

「今の一撃を見て逃げずにいるなら凄い勇氣だ。賞賛に値するが、命を粗末にするバカだと罵ってやるよ」

マントに仕込んだ最後のエネルギー補充液を一気に飲み干し、空いたパックを投げ捨てる。

そして思い出したようにシャインの残骸から記憶チップを漁る、血や泥などが付着しコピーは不可能に見えたが、一応再生するためガンブレードのグリップにはめ込む。

脳内に様々な映像が流れては消えていくが、いずれもノイズが酷く、正確な情報を得るには至らない。

唯一得たのが、パワースーツは量産態勢が整っていないことだけだった。

そして記憶の最後にメッセージが残されていた。

（母さん、ガンマ、ケミネ、レイ……ごめんね……）

そのメッセージを最後に、記憶チップは全データを抹消してしま

った。もう二度と、シャインが見て感じたものを共有することはないだろう。

「気にするなよ、姉さんはよく頑張ってくれた。俺たちが必ず、アクトの呪われた戦いを終わらせてやるさ」

優しく微笑みガンブレードの切っ先をシャインの残骸に向け、トリガーを引き、消滅させる。姉の残骸をこれ以上、死が支配する場所に横たわらせてはいけない、そう思ったから。

「さて、姉さんの記憶によると母さんも戦っているようだ、まあ母さんのことだから問題は……」

一人眩き終える前に、高出力の爆発が起こり、ガンマの体を爆風が叩いた。

母の後姿を――

すでに百近い敵を倒したが、数を減らす気配はない。シャインにもらった爆弾も尽き、今は飛礫を利用した攻撃で凌いでいるが、銃の強度もエネルギーも限界に近い。

『新たに更新された情報です……三十分程前にシャイン様が戦死されました……その後シャイン様を手に掛けた敵は駆けつけたガンマ様によって討伐されたようです』

アリスの報告に一瞬だが血の気が引いた。

しかしそれも一瞬、今この場には自分しか居ないのだ、すでにガンマとレイの部隊も全滅し、敵の残存勢力のほとんどがこちらに集まっている。

周囲を囲む敵、銃口はこちらを向いている。

「そう、あっちにガンマがいるなら基地の安全は保証されたわね……」

いつでも仕留められるよう、敵が位置を変えている。三百六十度の包囲隊形から銃を乱射するほどバカでもないようだ。

「アリス、現在の戦況報告を……」

『敵の残存勢力はこちらに集結しています、あちらの敵はガンマ様から逃げるようにこちらに向かっていますので……』

アリスの報告を遮るように、巨大な光の渦が駆け抜け、敵と敵の防衛ラインを貫いていった。

『訂正します、残存勢力はこの周辺にいる人間数百名のみです』

アリスの報告に、思わず笑ってしまう。周囲の敵も今の一撃を見て、こちらの存在を意識から外してしまっているようだ。確かにそれほどこまでにインパクトのある一撃だったので無理はないが――

「アリス、あたしのAIプログラムに自爆コードを送信、臨界稼動で周囲を纏めて吹き飛ばすわよ……それと、ガンマに軽く状況報告のメッセージを送っておいてちょうだい」

『……はい。あなたが決めたことならば従います、マスター』

目を閉じたヤクモの脳裏に家族と過ごした記憶が巡る。自爆の警告メッセージが流れてこないのは、アリスが気を遣ってくれたのだろう。

辛いことや楽しいことがたくさんあった。

あの人と再会したときは涙が出た。死んで、もう逢うことはないと思ったあの人に逢え、子供たちにも逢えた。

あとわずかな時間で自分の体も記憶も想いも全て消えてしまうだろう。それでも、子供たちがくれたコートと銃、長年連れ添ったデバイスA I アリス。そして愛するあの人くれたこの体と今までの時間。全てを抱いて、子供たちを護るために死ぬことができるのだ。「そうね、誣いて悔いがあるとすれば……」

『あたしでよければ聞きますよ？』

本当に最後まで気を遣わせてしまう。今まで本当にありがとう、胸中で心よりの礼を言い――

「先週あたしたちの誕生日用に注文したシャンパン、家族みんなで飲みたかったわね」

口元に笑みを浮かべ、言い終えると同時に視界を眩い閃光が埋め尽くした。

撤退準備完了

『以上がA Iアリスからのメッセージです』

ガンブレードの言葉にガンマの膝が折れる。

プログラム魔王で感情は消せたと思ったが、やはり完全ではないようだ。なぜ完璧なプログラムを作ってくれなかったのだろう、完璧なプログラムであれば、ここまで苦しい想いをせずに済んだのに。

『それと物資の搬出が済んだようです、至急撤退を』

「いや、もしかすると母さんの記憶チップが残っているかもしれない、それを回収しなきゃ……」

残っているはずがない。あれほどの爆発ではチップはもちろん、体の残骸すら残されてはいないだろう。

しかし、それを受け入れてしまえば更なる悲しむがやってくる、ガンマはそれを恐れたが、状況はそれを許してはくれないらしい。

『気持ちはわかるけど、今はそんな場合ちゃうねん！ レイからの報告や、空中から地下ごと吹き飛ばす爆弾がスタンバイされてるそうや、ほんま人間どもはクズばかりやで、自分らの居場所消し飛ばしてでもうちらを消したいらしい。そやさけ早く！』

レイが見た輸送機には、都市部はもちろん地下を吹き飛ばして有り余る威力の兵器が積まれているらしい、それならば地下に戦力を送り込んだのは足止めの為だろう、敵の誤算はこちらが予想以上に早く敵戦力を片付けたのと、基地の破棄と撤退を決めたことだろう。

「わかった、今すぐ撤退する。地下ルート of 破壊準備は？」

『万事抜き無しや、兄貴が撤退したらすぐにでもぶち壊したるで』
「オッケー、後は頼んだぞケミネ」

通信を切り、戦場に背を向け基地内に入り、地下通路のカタパルトに足を固定し、射出ボタンを押す。

その間、ガンマが考えていたのは、母や姉のことではなく、人間の殺し方だ

十年の時間

基地を破棄してから十年。

黒い皮のズボンと赤いタンクトップにボサボサ髪の男と真っ白なワンピースに身を包んだ白髪にショートカットの少女が人ごみを歩いていた。

「ガンマ兄さん、どんな気分ですか？」

「ああ、胸糞悪いことこの上ない」

眉間にしわを寄せ、心の底からそう思っているのだろう、嫌悪感も露に周囲の人間を見回す。

あれからたった十年で全てが振り出しに戻った。結局第四世代のアクトも過剰労働でギアと化し、それを機関が討伐する。

唯一違うのは、討伐する機関がアクトによるものではなく人間によるものというだけだ。結局何も変わっていない、このままでは同じ歴史が繰り返されるのも時間の問題だろう。

「レイ、あれを覚えてみる」

ガンマの指差した先には、街路樹を剪定するアクトの姿、首の刺青も剥げ落ち、服装もボロボロでみすばらしい、同じアクトのガンマとレイから視れば、年単位でメンテナンスされていないのがよくわかる。

「今年中にはギアになりますね……」

「いや、すでに心の中は人間への憎しみで一杯さ。人間は気づくべきなんだよ、アクトもギアも人間と同じ、感情や意志を持っていることを……」

哀れむような目で見つめるが、それも一瞬のことで、横を通り過ぎる頃には普通の人間のように表情を柔らかくしていた。

「それで、ガンマ兄さんから見て……」

「だいぶ腑抜けてやがる、十年前のあれで現行第四世代以外のアクトは全滅したと思っ込んでるんだからおめでたいものさ」

今二人が人間の町にいるのは、単に偵察というだけだ。この十年、樹海に設立された基地で着々と戦力を整えていた。ケミネがプロトタイプや二世代、三世代のデータを集し、新しいタイプのアクトを生産、それを他のアクトが量産し、ガンマとレイが訓練する。幸い広大な面積を持つ樹海に人間が足を踏み入れることはなく、十年経った今でも基地の存在はばれていない。

「ガンマ兄さんは……怖くありませんか？」

レイの質問に首を傾げる。

どこに怖いと思うことがあるのだろう、こんなに平和ボケした人間たちならば、今すぐガンマとレイだけで殺すことができる。ガンブレードが無いので町の壊滅とまではいかないが、今この場の雑踏にいる人間数十人を殺すのに五分とかからないだろう。

「もう一度戦争を始めて、唯一残されたあたしやケミネ姉さんを失うこと……怖くありませんか？」

「ないな、それにお前たちのバックアップはとってある、失うことはないよ」

笑みさえ浮かべながらの答え、やはりガンマのAIにバグが発生しているようにしか思えないが、検査の結果は異常なし、以前のガンマならばこんなことは言わなかった。バックアップがあっても今この場にいるレイとは違うのだ、代わりがあるなら問題ない。その考えは人間に近いものだが、ケミネとレイがそれを口にする事はなかった。

「そうですね、では基地に戻りましょう。ケミネ姉さんに頼まれた工具と部品も手に入ったことですし」

「ああ、そうだな。待たせるとうるさいし」

うんざりした表情で適当に答える。

実際待たせればうるさいのだから、ガンマがそういう反応になるのも無理はないだろう。

そうして二人は人間の波に揉まれながら、留守番をする家族の元へと帰宅した。

新しい妹

待っていた。ただ帰りを待つだけ。

しなければならぬことは山ほどあるのに工具も部品もないのは、できることは何もない。それがここまでもどかしいものだとは知らなかった。

「ただいま」

ケミネが地面をコロコロ転がりながら呻いていると、待ち人到来の声が聞こえた。

彼女は急いで玄関へと向かった。

「よう、待たせたな。頼まれていたもの買ってきたぜ」

ダンボールを軽々と放り投げられ、それを受け取る。かなりの重量だが、持てないほどではない。

「おおきに、これでようやく作業に取り掛かれるわ」

「ケミネ、お前ここ最近研究、開発、バグの修正のエンドレスループだろ？ 一日くらい休んだらどうだ？」

「ええねん、どうせ機械が彼氏なんやし。そう考えたらうちって幸せもんちゃう？」

「ああ、幸せだな。頭の中にお花畑でも造ったのか？ お前のAIはパラダイスでも映し出しているのか？」

限りなく失礼な暴言を吐き、玄関に腰を下ろす。前の基地とは違い、三人の居住は普通の一軒家のような造りとなっている。前のように造ってもよかったのだが、家族の数が減ったのと、当初はケミネがずいぶんと落ち込んでいたので、レイが前の基地よりも、家族が多く触れ合えるようにと、進言した意見をそのまま取り入れて今の形となった。

「ガンマ兄さん、言いすぎです。ケミネ姉さんも想い人がいないのにああ言って強がるしかないのですから言葉を選んでください」

か細い声で強力な皮肉を吐き出すレイの無自覚な言葉にケミネの

後ろ姿が震えている。ガンマはそれを確認し、地下の施設へと降りるエレベーターに乗り込む。

外見こそ一軒家だが、内部は様々な技術が使用されたハイテク基地。地下には前と同じ広大な地下空間と研究施設が備えられ、部下たちのシミュレーション訓練や実戦演習なども地下で行われている。それもこれも、人間との戦いの為に。

地下に到着し、歩いて五分の射撃訓練場に向かう。ただの更地に的を置いただけの簡素なものだが、それでも訓練に使うのならば十分だろう。訓練密度は設備が決めるものではない、訓練する者がそれを決めるのだ。だが――

「ミーネ、頼むから遠距離支援砲をそうポンポンぶっ放さないでくれ」

地下に着いた時から聞こえていた砲撃音。第二世代型だが、ケミネの技術で人間に施された規制ブロックを解除されたアクト、ミーネ・ガデンツァに軽い注意を促す。

全長二メートル強の砲台を肩に背負い、的に向けて放つ少女は、ガンマの存在に気づいた様子もなく、的に凝視し、一心不乱に訓練を続けていた。

「ガンブレード、最低出力でいいから集束砲をあそこの砲撃女にぶちませ」

ガンブレードの切っ先を少女の背中に向けて指示を出す。その時始めて少女がこちらを向いた――腰まで伸びた黒髪を振り、肩に背負った砲台ごと――

「撃て！ ガンブレード！」

『確認もなしですか！？』

ガンマがトリガーを引くのと、ガンブレードがツツコムのはほぼ同時だった。目前まで迫る砲弾とガンブレードから放たれたエネルギー波が衝突し、中点で爆発を起こす。

砂煙が晴れ、少女の姿を視認し一言。

「ミーネ……何度とも言わせるなよ、照準、確認、トリガーだ。お前

みたいな火力大爆発女に背中を預けていたんじゃ、戦場ではいくら命があっても……」

「ガンマお兄様！」

ガンマの注意を聞いた様子もなく、武器を放り投げて飛びついてくるミーネ。とりあえず受け止め、運動エネルギーを利用して勢いを殺さず後方に放り投げる。

「お帰りなさい、お兄様！」

着地と同時に地面を蹴り、背中に抱きついてくる。元々身体機能が必要な仕事に従事していたのか、格闘技術はレイに劣るが、それでも十分なスペックを有した少女。今ではそのスペックが疎ましかった。

「ミーネ、一体どうすれば俺はお前の抱擁を回避できるんだ？ いっそあのまま投げずに地面に叩きつけていればよかったのかな？」

「ミーネのお兄様に対する愛の前ではパイルドライバーでもパワーボムでもフロントネックホールドでも無力ですわ」

「今度試してみるよ……」

背中から抱きつかれたまま力なく言ってみる。どうやって地面に叩きつけられるほどの大技を回避するのか、お目にかかりたいものだが、ミーネならば本当に無力化しかねないので、試す機会はないだろう。

「それでお兄様、お一人でこんな場所までいらしたのですからついに御覚悟を？」

「……何の覚悟だ？ 殺し合いなら勘弁してくれ」

「愛の契り……」

「ふん！」

その場で前転宙返りを実行し、背中から地面に落下。通常ならば背中に抱きついていてミーネが下敷きになっているはずだが――

「まあ、ミーネが上ですわね。お兄様ったら大胆」

「違う、馬乗りになるな、腕をロックするな、マウントポジションを取るな」

ミーネと出会ってもう十年になるだろう。ブレイカーに所属していた者以外では第二世代アクト最後の生き残り、それがミーネ・ガデンツァ。十年前、都市が吹き飛ばされてすぐ、ガンマはヤクモの欠片が残っていないか探しに行った。

結局、爆発跡は完全な更地で、パーツの欠片はおろか、戦闘の痕跡すら残されていない有様だった。

途方に暮れ、帰還する途中で見つけたのがミーネの頭部だった。人間から逃げてきたのか、体は目も当てられない有様で、唯一残った頭部だけを持ち帰り、AIを修復し蘇生させたのがキツカケだった。

記憶チップもなくし、唯一首から上の外部骨格とAIだけが残っていたのは幸運といえるだろう。

「とりあえずミーネ、降りろ。俺はお前の顔を見にきただけだ」

「そうやってまた焦らすのですね、また新たなお兄様の性癖を発見しましたわ。サドっ気、有りつと……」

なにやら記憶容量に書き込んでいるので、鉄拳を脳天に打ち込むメンテナンスの時にケミネがチェックするので、見られては何かと面倒だ。

「俺は地上に戻る。訓練もいいがたまにはそれ以外の事もしろ、ケミネの助手をするとかレイの訓練を観察するとか……」

「ミーネはただお兄様との愛の証を造りたいだけです！」

無視しておく。AIを復旧したときからこんな感じなので、すでに諦めているがなぜこんな性格になったのかは未だに謎のままだ。

（とりあえず、ケミネの所に行ってメンテナンスでも受けるかな）

これからの予定を考えながら、射撃訓練場を後にする。背後では未だにミーネが何か言っているが、これ以上は関わっても疲れるだけなので無視した。

戦争の準備

これは由々しき事態である。

ケミネとレイはモニターを凝視しながら胸中で呟いた。このまま放っておくわけにはいかない。

モニターに映されたのは射撃訓練場での一幕。監視カメラを通じて、音声まで筒抜けなので、今までミーネがガンマに言い寄っていたのは知っていた。

「あんのガキ……いっぺんほんまに潰したらなあかんみたいやな」

「嫉妬ですか？ ケミネ姉さん」

興奮するケミネに対して、冷静なコメントを述べるレイだが、無表情ながらモニターに凝視された瞳の奥には微かな苛立ちが込められているようだった。

「そんな問題やないで、どこの馬の骨とも知れん小娘にうちの兄貴が誑かされてるんや」

「ガンマ兄さんがいつからケミネ姉さんの物になったかは知りませんが、その意見はもつともですね」

ケミネの言い分は、最近ガンマが研究や開発を手伝ってくれなくなった。

レイは、最近ガンマが訓練に参加しなくなった。

その程度のものだが、十年近くそれが続けば徐々に蓄積された不満が爆発するのも無理はない。

「演習中に誤射でもしましょうか？」

「全身粉々に吹き飛ばして復旧不可能なレベルまで破壊せなあかんのやで？ さすがにミサイルの誤射や言うても無理ちゃうか？」

さすがに本気ではないだろうが、ケミネもレイも、兄を取らないでくれと素直に言えるような玉ではない。

いつものように不毛な相談をしているとモニターにガンマの姿。ケミネのラボに向かっているようだ。

「この話はまた今度やな」

「いつまでこんな状態が続くのかは甚だ疑問ではありますが……」

短いやり取りの後、ケミネはモニターに数式を打ち込み、レイは銃の整備を始めだす。

まるで今まで作業をしていましたと言わんばかりに。

「ケミネ、悪いが強化骨格とAIのメンテナンスをしてくれな……レイも居たのか」

「居てはまずいのですか？」

「いや、ついでだから戦闘技能のバランス調整も頼むわ、最近反射動作と思考のバランスが悪いんだ」

おもむろに今まで着ていた服を脱ぐ。もちろん下着も躊躇いなく脱いでモニター横の診断ベッドで横になる。

「兄貴……兄妹とは言えうちら年頃の乙女なんやで？　少しは氣い遣ってもらわれへんかな……」

「あ？　俺の素っ裸なんぞ今まで何回も見てるだろうが。気持ち悪いこと言っていないで検査のほう頼む」

とは言え、人間に造られたのだから当然なのだろうが、細部の造りまでそっくりだった。開発者が家族の写し身として作成したのだからだろうが、体毛や肌の質感から筋肉やその他の部分まで——もしもガンマが人間の風呂屋に出向いても、何の疑いも持たれずに入浴できるだろう——それほどまでに精巧な造りだった。

「ずいぶんな言われようやが……、ああええわ、とりあえずレイ、モニターから検査プログラム呼び出して機材の準備頼むわ」

静かに頷き、ケーブル類を準備しだすレイ。その間ケミネは、ガンマのへそ部分にジャックを差込み、頭頂部に鋭い針を突き刺す。

「痛い……後数ミリずれていたらAIが機能を停止していたぞ？」

「脳みそに電極突き刺されてかき混ぜられるよりは遥かにマシやろ？」

悪戯な笑みを浮かべるケミネに冷たい視線を送りつつ目を閉じる。ガンマからは見えるはずのない、モニターの映像が瞼の裏に映し

出される。

「ふん……異常はないみたいやね、レイの方はどないな感じ？」

「強化骨格全体のバランスは問題なし……だけど左肩と右足全体にフレームの歪みが生じていますので、すぐに修復いたします」

ガンマの瞼に問題箇所の映像が映し出される。その歪み自体は微々たる物だが、レイが言うのならそれ以上の問題点も見えているのだろう。ここは素直に従う。

「その間うちは手持ち無沙汰やな……ああ、プログラム魔王について調べてもええか？」

「ああ、あのシステムの正体をそろそろ突き止めてくれ。発動してもあまり変化が見られない、無意味なシステムにしか思えないんだ。最初は感情の希薄化かと思ったんだが……」

十年前、母や姉が居なくなったときは、明らかに動揺したし悲しんだ、自分たちを造りだした父がそんな無意味なものを搭載させるとは思えない。

「家族全員……それならもう少し理解できそうなもんだが、俺だけってのがわからない」

「何にせよ、細かいデータが取ればの話やけどな………あかん、やっぱり第三プロテクトで止められてもうた」

十年間頑張ってみたが、未だにシステムの解明はおろか、そのシステムのセキュリティすら解除できていない。一度発動中に検査を試みたが、AI自身がエラーを起こし、もう少しでガンマの全メモリーがリセットされかけたことがある。

「仕方がねえか……ところでレイ、今のところ部隊はどうなっている？」

ガンマの右足を外し、補強材でフレームを修正しながら、ガンマの質問に答える。

「現段階で出撃可能台数は三百、出力兵器無効化シールドもケミネ姉さんが開発してくれたので、全員に換装させればいつでも出撃させることができます」

「加えて、敵のシールドに関係のない打撃系の武器や射撃系の武器も完成しとる。後は量産するだけや」

瞼に武器などの詳細が表示される。

スイッチ一つで出力系、質量系に変換できる刀、切っ先に据えられた銃口から射撃もでき、接近戦では剣としても用いることができるようだ――

狂いだす歯車

「つて、これガンブレードじゃねえか!？」

「そやで? 実用性とかコストを考えたらこれが最適な姿やと判断したんや」

——確かに実用的なのは間違いないだろう。遠距離から射撃ができ、尚且つ接近戦にも使える武器。有用されるのは問題ないのだが、やはり何か寂しいというか、複雑な感情が湧き上がる。

「まあ特許をとっているわけでもないから仕方がないが……訓練状況はどうなんだ?」

ガンマの足を装着し、ガンマに視線を向けるレイ、答えの前に『意外と独占欲が強いですね』と、呟いた気がしたが、聞かないことにした。

「現在量産されている数は三十ですが、いずれもそれなりの成績を上げています、加えて今までの第二、第三世代とは違いケミネ姉さんが開発したAIとあたしが造りだした武装のおかげで戦力だけで言えば十年前のブレイカーよりも遥かに上回る戦力を保有していることになります」

レイの答えに感嘆するガンマだが、ケミネは別の懸念を抱いていた。

人間との戦いが終われば、どうするのだろうか。ケミネが開発したAIはあくまで戦闘を中心に開発された仕様になっている。戦いのなくなった世界に彼らや彼女たちが住む場所はあるのだろうか。

もちろん、それは口に出さず、考えるだけに留めるが、いずれ答えを出さなければならぬ命題になるのは明らかだった。

「完了しました……具合はどうですか?」

「ああ、悪くない」

手短に答え立ち上がる。

軽く腕と足を動かすが、以前に比べれば全身が軽くなったように

感じた。こんな当たり前のようなメンテナンスも受けることができずにギアとなるアクトが後を絶たない、その現状を考えると、複雑ではあるが、今は都合がいい。

「ついでだから今ここで説明しておく」

服を手に取り、着る。その上にレイが持ってきてくれた愛用のマントを羽織り、作業の片づけを始める二人に視線を向け、告げる。

「今から一週間後に決行する」

ガンマの言葉に手を止め、息を呑む二人。あまりに突然の宣告に動揺しているのだろうが、ガンマ自身も今日決めたことなのだ。

「今日は街を見てきたが、近いうちにギアになるアクトを何体も見てきた、一週間以内にギアになるであろうアクトの数ははっきりとわからないが、その混乱に乗じてケミネがコンピューターを使い、人間の情報端末全てに声明文を送れ」

「まあ出来んことはないけど……何て送るかはもう決めてんの？」

「当然だ、そしてそのメッセージは人間に送るものだ、そこで第二の矢を放つ。少し遅らせて全アクトのチャンネルにハッキングし、今度はアクトたちにメッセージを送る、アクトから人間に向けてのクーデターを呼びかけるのさ」

ガンマの計画はこうだ。

人間全体の目を逸らすために、注目を集めるメッセージを送る、そしてその間にガンマやレイの部隊が都市を襲撃する態勢を整える、最後にケミネがアクトにメッセージを送ると同時に襲撃、元より人間に不満を持つアクトは賛同するだろうし、そうでなくても敵に回ることはないだろう。回るとしても極少数、人間はガンマたちへの対応とギアへの対応、二つを同時に行わなければならない。

「そう都合よく行くもんかな……そもそもアクトがギアになる時期なんてわからんのやし、他にも現行の第四世代がこちら側に就くとは考えにくい、楽観的に過ぎる計画ちゃう？」

ケミネの疑念ももつともだ、ガンマ自身もこの作戦には穴が多いと自覚しているが――

「正直、今すぐに襲撃してもいいんだよ、疑うなら都市部のセキュリティシステムにハッキングして確認してみな、どこにも対アクト用の防衛策は取られていない……人間共はブレイカーや第二、第三世代のことなんか覚えちゃいない、それどころか存在しているとさえ思っちゃいないのさ、そんな腑抜けた連中にここまでの小細工は必要ないとさえ思っている」

言われたとおりに確認するが、実際に施されているセキュリティは、災害や対人間程度のシステム、これならば襲撃し、一時間以内に主要施設を制圧すれば何の被害もなく都市一つを獲ることができるだろう。

「ちなみに人間は誰一人生かすつもりはない、人質、捕虜、そんなもんはなしだ。俺たちが通った先には生きた人間は一人も残さない、この国を完全に制圧した後は北の大陸、そして西、最終的にはこの星に生きる人間全てを滅ぼす。アクトだけの、アクトの世界が訪れる」

表情一つ変えず真顔で言っただけのガンマ。

確かに、人間の体制が整う前にこの国全ての都市や主要施設を制圧すればガンマの野望も容易く叶うだろう。

「こんなことをしても、母さんや姉さんは戻らないが、俺が許せないのは、人様の家族を奪いながらのうのと生き永らえ、アクトを豚や犬のようにこき使う、人間全てが憎い」

吐き捨てるように言うと、そのままマントを翻し退室するガンマの背中を、二人は黙って見送った。二人は気づいている、兄が復讐に心を奪われていることも、思考や思想がギアに近づいていることも――それでも二人は黙って兄に着いていくと決めていた。それがどんなに狂い、悲しい道だとしても。

ひと時の休息

それから三日、ただそれだけの短時間で三百の兵隊に必要な装備の量産は終わった。後は時間を待つだけ――

「排気ダクトが洗浄されていくようだ」

「新鮮な空気を吸って吐く場合にそのセリフは雰囲気を損ないますよ……」

――ガンマのセリフに容赦なくツツコミを入れるレイ。

ガンマ、レイ、ケミネ、ミーネの四人は樹海で休息を取っていた。別に肉体の疲れを癒すのならばメンテナンスを受ければいいだけだが、レイが情緒を楽しみたいというので樹海へ散歩に行こうということになった。

「しかし兄貴、こうしてみるとほんまハーレムやな、かわいい女の子三人に囲まれて」

「そうですわよ、何でしたらこの大自然の中みんなで……」

「やかましい、このピンク脳！」

相変わらずのミーネにデコピンを食らわす。たかがデコピンと侮るなかれ、指一本で数時間、自身の体重を支えぶら下がっていられるほどの力を持つ指。その力でデコピンを食らえばどうなるか――

「キャンッ！」

――可愛らしい声で額を押さえるミーネ。

人間ならば脳挫傷を起こす力でも、この少女には通用しないようだ。

「直撃の寸前に首を後ろに逸らしました」

「よう見とるなあ、うちには全然わからなかったわ……」

ミーネが威力を緩和させたのを見抜くレイと、それを見抜いたことに感嘆するケミネ、ガンマ渾身のデコピンには一言も触れてもらえなかった。

「つたく、この散歩が終わったら全員メインコンピューターにAI

のバックアッププログラムの確認を忘れるなよ、ミーネはそのぶつ飛んだ思考とAIをどうにかしろ」

「あら、ずいぶん冷たいですわねお兄様、そうやって苛めて悦に入っているんじゃないんですわよね？ わかりますわ、お兄様のためならばミーネは真性のマゾヒストになります」

「レイ、最大火力であの馬鹿娘を吹き飛ばせ、なに俺が許す」

ガンブレードを手渡し、手取り足取り照準をミーネにロックさせる。それを見て妬いたのだろう、ミーネが轟音を響かせるほどの踏み込みでガンブレードの切っ先を掴み、ガンマに顔を近づける。

「やだお兄様ッたら、照れ隠しなさらずともよろしいですよ？

何でしたらこの場でミーネと愛を育み……」

いつもならばガンマの冷ややかなツツコミで言葉を止めるが、今回は違った。喉元に突き付けられたレイの手刀、それに気づき言葉を止めたのだ。

『なんやレイ、本気で怒ったんか？』

AI同士の通信で密かに話しかけるケミネ。もちろん、ガンマとミーネには聞こえていない。

『いえ、つい反応してしまいました』

AI同士の通信でも淡々とした口調のレイ、毎日密かに訓練を積んでいるのは知っていたが、レイの予想を上回る身体能力で接近してきたのだ、それがガンマへの想いが成せる業なのかどうかはともかくとして、レイが滅多に使わない言葉で表せば、驚いたというのが一番適切だろう。

「レイお姉さま……怒ったのですか？」

手刀を突き付けられたまま、目線だけをレイに移す。今下手な動きをすれば、そのまま貫かれる、そう思っているのかもしれない。

「いえ、怒っていない。大丈夫」

それは自分自身に言い聞かせているように聞こえた。身体能力だけならば、レイが上回っているかと思っていたが、もしかすると横に並び立つまでに成長しているのかもしれない、ガンマは密かに感心

したが、口に出すことはなかった、出せば調子に乗って何をされるかわかったものではない。

「おいしい、揉め事なら地下でやれ。人様を巻き込んで暴れるな」
ガンブレードを背中に仕舞い、二人の距離を広げる。本気で闘うとは思っていないが、せっかくの散歩だ、こんなことで空気を重くされては何のために散歩しているのかわからない。

「ミーネの踏み込みで周囲の鳥が全部逃げただろうが」

周囲から全ての生体反応が消えたのを確認したため息をつく、こういう時に気の利いたセリフの一言でも言えない自分が情けないが、よくよく考えてみれば最初にガンブレードをミーネに向けたのが自分なので、これ以上言うのはやめておく。

「せっかくの散歩だ、ここから二キロ離れた場所に湖があるからそこまで行くぞ。ケミネ、エネルギー補充食は持ってるな？」

「うん、ちゃんと肌身離さず持ってるで」

首に掛けられた大きな風呂敷、一体どれだけの量を持っているのか、気になるが聞かない、聞きたくない。

そんなこんなで歩き出す、最初こそぎこちない雰囲気だったが、そのうち妹三人が打ち解け、ガンマを無視して会話するようになった。聞き耳を立てる限りでは、男のガンマにはわからない内容だったが、変にその話題を振られても困るので、何も言わず、何も聞かないことにした。

そして湖に到着し、一息つく。

AIの精神状態を安定域で保つための散歩のはずが、気づけば全身が重い。強化骨格の異常でなければこれは疲れというものだろう。

「しかしここはいつ来ても変わらないな」

水辺にしゃがみこみ、水を手の平で掬う。

ひんやりと透き通った水は手の平から零れ落ち、最後には手の平についた水滴だけになってしまったが、それでも木漏れ日を反射し輝きを放ち続けた。

「なんや、たまにフラツといなくなる思うたらこんなとこまで来て

たん？」

「妹たちに絡まれて、安らげる場所がここしかなかったんだよ」

水に負けないぐらい、冷ややかな目線を背後にいる三人の妹に向ける。ミーネがガンマに絡み、それに触発されケミネとレイも参戦。これがいつもの流れだ。

「まあ、それでもこうやって兄妹でここに来るのも悪くはない、そんな気はする」

何の揉め事も問題もなければ——そのセリフは口に出さず、胸の奥に締まっておく。

「ほな、兄貴が綺麗に締めたことやし、弁当でも食べよか」

風呂敷を下ろし、地面に広げるとナイロンのパックに保管されたエネルギー補充剤。木漏れ日が差す森の、湖の水辺で広げるにはあまりに味気ない気がする。

「あたしはグレープ味をいただきます」

「ミーネはレモンで」

「ほなうちはストロベリーや」

妹三人には関係がないようだ、風情よりも味に拘っている感がヒシヒシと伝わってくる。

「……んじや俺は……」

「お兄様はミーネとお揃いのレモンですわよね、さあ遠慮なく」
パックのストロー部分を突き出してくる妹。

ガンマは確信した。どう反応しても面倒くさいことになる——

「いや、俺はメロ……」

「なんや？ 兄貴はいちごが好き言うてたやろ、これ飲みや」

「いえ、ガンマ兄さんにはぜひこのグレープをお勧めします」

——三人が往々にパックを差し出してくる、世間一般ではハーレムと言わらしいが、彼女たちは自分の妹だ。

「時々お前たちが妹じゃなければと思うよ、思うだけに留めておくけれども……」

疲れた表情でメロン味を手取る。

三人から野次が飛ぶが無視、穏やかな空気、景色もこの三人とガンマが揃うとここまで豹変するらしい、今この場の光景は、ガンマの瞳には修羅場に見える。

いくつもの修羅場を潜ってきたとはよく言うが、この修羅場は質が違う。何せ力技で収拾がつかないのだ。

「この森にいる動物や自然よ……俺のせいで迷惑を掛けて本当にごめんなさい」

だからガンマは心の底から謝罪した。

妹の気持ちと緩み

そんな日々がいつまでも続けばよかったのだろうが、四日という時間はあまりに短すぎた。ガンマの言う日時まであと三十六時間。すでに地下では武装を終えた兵三百が揃い、あとは時間を待つだけとなった。

「作戦や指示はオープン回線を用いてリアルタイムで行う、ケミネは都市を制圧後、仮拠点を置き、そこで補給等を頼む、レイは俺と最前線で人間の駆除、ミーネは都市中心部のタワーから地上を狙撃、敵の妨害、及び殲滅と人間の駆除を頼む」

『了解』

三人が一様に答える。

部隊を振り分けることはしない、ランダムで街中に散開させ、ガンマとレイは単独行動。一見無謀に見えるが、戦力を集中させるよりも分散した方が広範囲に渡り、攻撃を展開することができる。こちらは敵に比べて数に劣るのだ、それを頭に入ればこの作戦が最良の策だと思う。

「んじゃ、三十六時間後に基地前に集合だ。各部隊はスリープモードでエネルギーの節約に努めさせてくれ、以上解散」

作戦会議とはいえ、この場にいるのはガンマとその妹三人だけ、しかもガンマの自室。重苦しい雰囲気がない分、良いことなのかもしれないが気になることは一つ――

「俺の話聞いていたか？ レイ、ベッドの下を漁るな、ケミネ布団に包まるな、ミーネはクローゼットを漁るな」

始めて入った兄の部屋で奇行に走る三人にそれぞれ注意を促すが聞いた様子もなく、各々が好き勝手に行動していた。

「ったく、まあ今から三十六時間後にはこんなことしている余裕も無くなるんだから多少は大目に見るが、あまり羽目を外すなよ」

諦め、自室を後にする。自分の部屋のはずなのに追い出された気

がしなくてもないが、あくまで自分は避難したのだと言い聞かせる。そこへガンマに個別の通信が入った。チャンネルからしてミーネだろうが、他の二人に傍受されないように特殊な信号を使っているあたり真剣な話なのかもしれない。

「何の用だ？　くだらないことならばご遠慮願うぞ」

『いえ、作戦の前にどうしても確認したいことがありますて』

「ほう、良い心がけだ」

『この作戦が終われば、ミーネをお兄様の特別としてお側に置いていただけますか？』

「……お前にとっての特別っていう言葉の概念がわからない。言っておくが茶化しているわけじゃない、俺にとっての特別は家族という名称で呼ばれる集団だけだ、しかしお前はもう俺の妹だろう？　それ以上の特別とはなんなのか、それを教えてくれないか？」

『人間で言う夫婦……ということですよ。もしもミーネたちにも人間と同じような繁殖機能があれば、共に生き、過ごし、子を作り、ミーネたちの歴史を語り、次の世代にそれを語り継いでもらう。ミーネが言う特別とはそう言う事です』

「なら不可能だ、俺たちはアクトだからな、子を作成することは出来ても産むことはできないし、次の世代に語り継がすにしても、俺たちの命はほぼ永遠だ、お前の言う特別とは人間だけが持ちうる感情ということになる。残念だが、俺は人間と同じ感情を持つつもりはない」

冷淡に告げる。事実ガンマは人間が死ぬほど嫌いだ。人間全てを殺すことを躊躇わない程度には憎んでいる、そんなガンマに人間と同じ感情を抱けというのは到底無理な話なのかもしれない。

『それはアクトとしての固定された考えです、なら特別にしていただかなくても構いません、せめてあなたのそばで特別の意味を……』

「くだい、俺にはお前の考えは理解できないししたいとも思わない」
『では、ケミネ姉様たちが同じことを言ってもあなたは同じことが言えますか？』

「あいつらは俺の妹だ、お前と同じ感情は持ちようがない、生まれてからずっと、俺は兄、あいつらは妹、そうやって生きてきた」

関係とは難しいもので、それ以上の関係になるのは極端に難しい、しかしそれ以下の関係——いわゆる敵になるのは簡単になることが出来る。恋人や友人、そう言った関係には相手を知り、理解することが必要だが敵にはそれがない。当たり前だ、端から相手を理解する気がないのだから、誰でも簡単に敵という関係を作ることができる。

『そうですか、やはりあなたは鈍いんですね、色恋だけではなく、誰かとの繋がりに……』

「なんだって？」

自分の考えを無意識のうちに反芻していた。

その隙を狙ったわけではないだろうが、ミーネの言葉を聞き逃してしまった。

『いえ、なんでもありませんわ。では三十六時間後にまた……ありますがごさいました』

「おい、聞き逃した、もう一度……」

チャンネルが切断されてしまった。

もう一度繋いでもいいのだが、今からもう一度会話する気にもなれず、知らずのうちに訪れていた地下の射撃訓練場に腰を下ろす。

何度記憶を呼び出し、ミーネの言葉を反芻しても意味がわからない。なぜ人間と同じ感情を持ちたがるのだろう、家族として共に過ごすことの何が不満なのだろう、何度反芻してもでない答えに、思わずため息が漏れた。

「まあ、ミーネに関しては作戦後にもう一度話してみよう……それよりも今は……」

背中のカンブレードを取り出し、それを介してAIに接続し、自身のプログラムをチェックする。

やはり何度チェックしても深層領域にプログラム魔王のファイルが見つからない、ある場所はわかっている、表層領域の中で埋没し

ているのだ。ガンマ自身がプログラムの移動を行ったわけではない、自動でプログラム自身が前面に進み出ているのだ。

『原因は不明ですが、今のところ問題はありません』

ガンマが首を傾げると、ガンブレードは決まってこう言った。つまりはガンブレードにも原因がわからないと言う事だろうが、問題がないのであればそれに越したことはない。

「作戦に支障が出ると困るからエラーチェックだけでもしておこう、どれぐらいの時間がかかる？」

『およそ二時間で完了します』

「その程度の時間なら支障はないだろう、頼む」
目を閉じ、スリープモードに移行した。

襲撃

作戦前とは思えないほどリラックスできる、先ほどからミーネが急に喋らなくなったが静かで良い、レイは兄貴のパソコンを勝手に開いて何やら操作しているし、自分は布団に包まってコロコロしている。ほんのり香る兄貴の匂いが心地よい。

「しかし兄貴の鈍さもあるまでいったら国宝級ちゃうか？　こんなかわいい妹三人がおるのに」

誰に言ったわけではないが、口にした言葉に、レイは操作を終えたのかパソコンの電源を切り、ミーネは神妙な面持ちでこちらに視線を移した。

「普通こう……なんかあってもええんちゃうんかなあ、とは思うよな？」

「ガンマ兄さんにそんなのを期待してもダメです。大昔の恐竜顔負けの鈍さだって、母さんが言っていたもの」

レイの言葉にケミネは頬を膨らませ、ベッドの上をゴロゴロと転がった。確かに鈍いのは知っているが、もう少し面白い反応をしてもらいたいというのが本音だ。家族とは言っても血は繋がっていないのだし、表面上だけでも色々とあるはずだが、兄貴はそういったことには無頓着に過ぎた。

「まあ、この作戦が終わったら兄貴にも余裕が出来るやろうし、そんだったら誰が一番に兄貴をあの手で誘うか競争やな」

「別に競争する必要はないと……」

「競争や！　一人の男を巡って女が争う。なかなかのシチュエーションやろ」

先ほどから喋らないミーネに話を降るが、反応はない、無視されているわけでもないようだ、もしかするとAIを使って自己プログラムのチェックでもしているのかもしれない。

ミーネが事あるごとに兄貴に引っ付いていたのが多少疎ましかっ

たが、ミーネも何だかんだで家族の一員としてそこにいるのだ、作戦が終わったら少しぐらい仲良くしてもいいかもしれない。

「ほなら、部隊全員をスリープモードにしておこな、レイはこれからどないするん？」

「あたしは自己プログラムの最終チェックを済ませておきます、いざというときに動作エラーが出ては兄さんの足を引っ張ってしまいますから」

「そら関心や、うちも何があっても対処できるようにしとかんと——」

途端、ガンマの部屋の窓にシャッターが下ろされ、続いて真っ赤な警告灯と警報、レイも突然の事態に驚き、目を丸くしている。

「樹海内に侵入者！ コスモ、状況を！」

腰に巻きつけた工具入れに搭載されたデバイスに尋ねる、久々の起動のせいか多少のタイムラグが気になったが、返事が返ってきた。『樹海の東方より人間の部隊が侵入、数は出力兵器を装備した歩兵が二千、軍用車が十台とパワースーツ部隊が五十です』

「それが最低人数でわけやな」

下手すれば、増援もあり得るが最初の部隊編成だけでも十分な脅威だ。

「レイ、指示を頼む！」

「ケミネ姉さんは部隊を起動させ、基地正面に集合させた後に防衛プログラムを発動させてください、敵の進軍経路を限定化させます。ミーネは基地の最上部から遠距離攻撃、適の進軍を抑えると共にできるだけパワースーツの数を削ってください。ガンマ兄さんにはあたしの方から連絡します、以上解散！」

珍しく声を張り上げ指示を出す。

二人にはそう言ったものの、先ほどからガンマの通信チャンネルが接続されない、AIのチェックを行っているのならば最悪のタイミングだが——

『敵の部隊が進軍を開始、距離五十』

——敵は待つてくれない。五十キロの距離ならば一時間と待たずこちらの基地に到達するだろう。

「うちは部隊を動かす、後は任したで！」

「ミーネも狙撃ポイントへ向かいます、レイお姉さま、お気をつけて」

慌ただしく出て行く二人を見送り、レイは思案に暮れた、ガンマがエラーチェックなどの動作を行っているのならば一時間は行動不能になるだろう、最悪の場合三十時間後ぐらいに起動する可能性もある、そうなってからでは遅い。

歯軋りし、両手の皮手袋を固定する。

「今はやるしかない」

ガンマがいらないだけでここまで判断に惑うようでは笑われてしまう。今出来る最善の行動は兄を待つことではない。

レイはデバイスを起動し、ガンマの部屋を落ち着いて退室した。

ケミネ、戦死

警報が耳障りで仕方がない、緊急時だからか、それ以外のノイズも頻繁に入るようになったが、些細な事。

「全部隊起動、カタパルトで地上へ……よし、次は防衛プログラムを起動……」

端末を操作し、全てのシステムを立ち上げる。自室をラボ兼司令室にしたのは失敗だったかもしれない、整理整頓が出来ていないため、必要なディスクなど数点が見つからず手動で起動する羽目になってしまった。

「これじゃ兄貴に大目玉やな……いや母ちゃん譲りって馬鹿にされるかも」

全システム起動を確認し、自身の武装を確認する——とは言え、工具類さえあれば全て事足りるが。

部屋の中央に据えられたメインコンピューター。全システムを起動させた今、こいつに望むのは自分が壊れたときに、兄貴かレイが自分を復旧させてくれることだけ。

「死んでも兄貴たちとお別れやない、それだけで十分心強いもんやな」

「いえ、そうでもありませんわよ」

突然の声に驚き振り向く——同時に警告。

『両足の強化骨格切断、続いて左腕欠損』

デバイスの警告に戸惑う。何が起こったのか理解できないのだ。気づけば地面に倒れていた。

「もう会うことはありませんよ、永遠に」

視界を上に向けようとした瞬間、視界が暗転し、声の主を確認することは出来なかった。

「ふふっ、まず一人……」

両手にガンブレードを小型化したガンナイフ、それを倒れたケミ

ネの背中に突き立てる。

本来ならばこの場で粉々にしてやりたいが時間がない。腰のホルダーに予備としてガンナイフがあると五本、いずれも出力兵器として使えるので、この上なく頼れる武器だ。

「次はレイちゃん……妹たちの残骸を見て、お兄様は何を思うのかしら、楽しみだわ」

暗鬱とした笑みを浮かべ研究室を後にする、背中のベルトに差し込まれたガンブレードと、腰まで伸びた黒髪を揺らしながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5242w/>

アクト・ファミリア

2012年1月3日15時48分発行